

177  
139

住吉名勝記

全

神  
照

住吉神社宮司 依五位田原藤津守國榮君題辭

神  
照



邦内

明治三十六年二月

国榮



邦内

明治三十六年二月

国榮

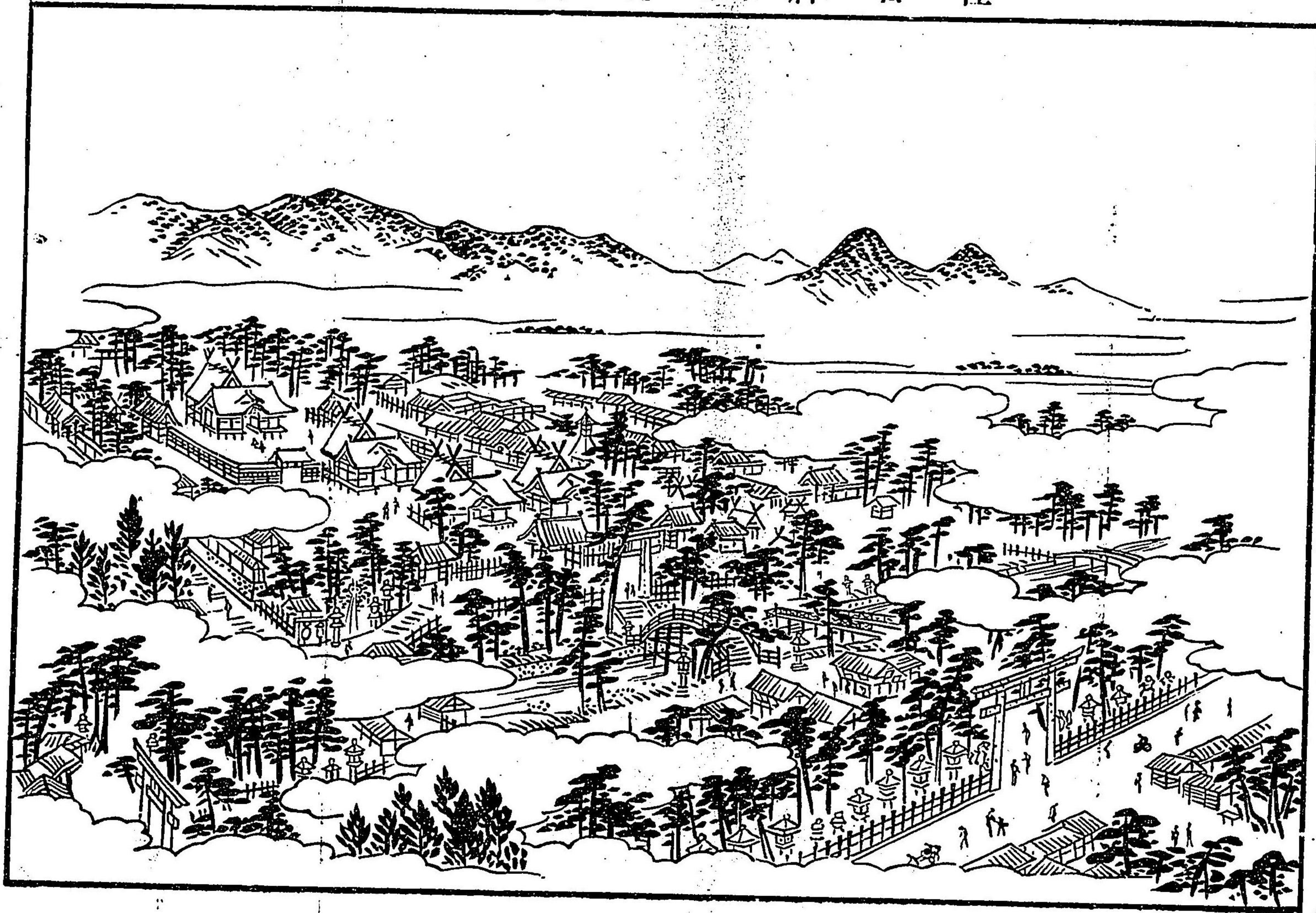
自備圖



はしがき

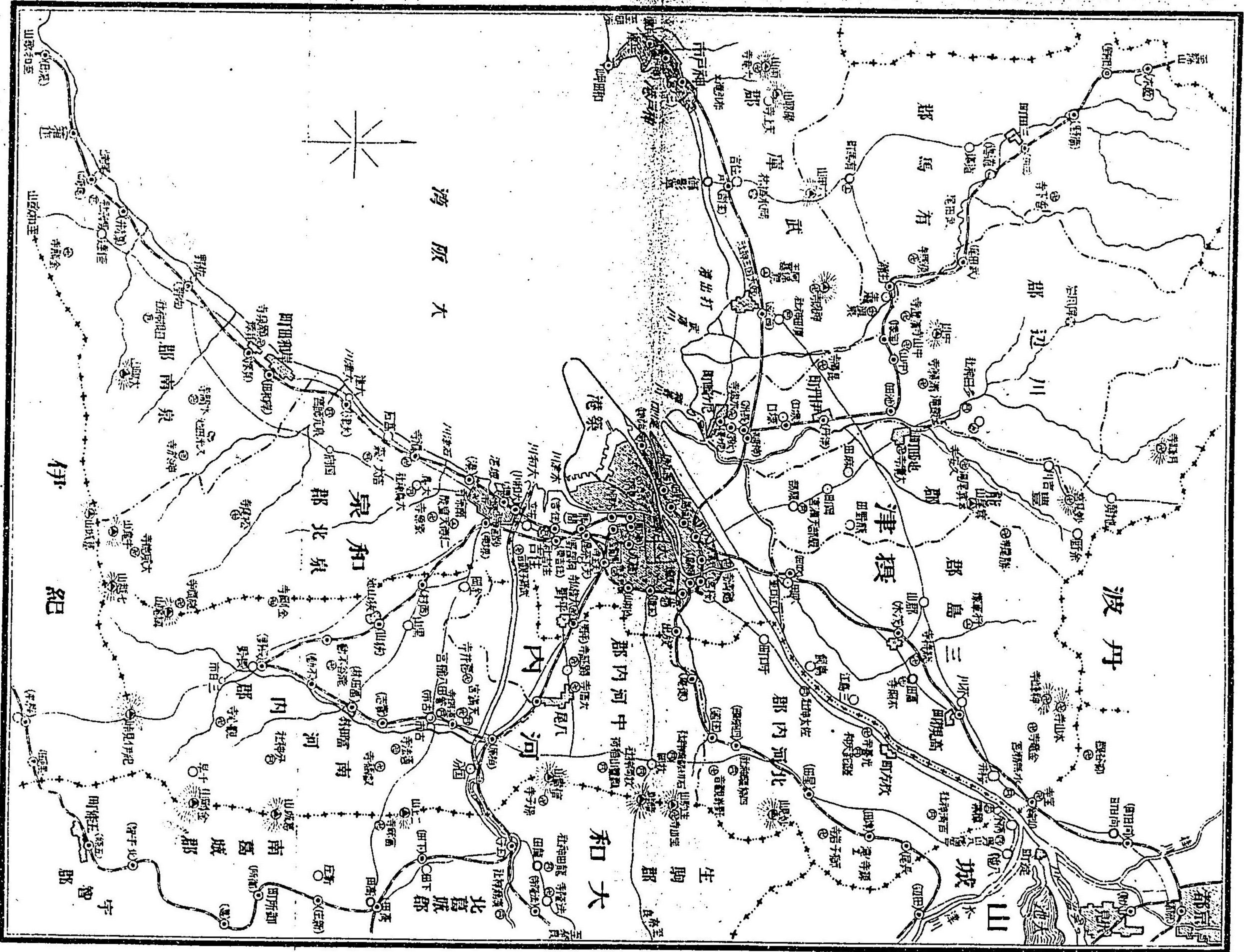
大阪見物に來遊する内外の人々第一着に足を向くるは住吉なり祭日  
休暇月花の折節市中近在の老若先參詣するは住吉なり是は神威の顯  
著と風光の優美なるに由れるならん街道の竹輿は昔話に昇き出す  
のみにて籠車と引きかはりしも亦籠車に走り勝たる、世の進歩岸の  
姫松を跡すさりさせし新田は追々に家建ち並び町めぐにつけて卯の  
日の賑ひ一層ましたるも昇平の賜なるべし茲に其神社の由來および  
名勝古跡などの大略を記して世に知らしめんとす

住吉神社境内之圖



目 録

官幣大社住吉神社	一頁
御祭神	一頁
御鎮座	八頁
文武守護	九頁
住吉名稱	十頁
探社末社	十二頁
舊社務家	二十五頁
御祭典	二十七頁
名勝古跡名物	三十七頁
大阪より住吉へ參詣順路	七十九頁
歴史及物語	八十一頁
住吉及近傍詩歌	百十二頁
以上	





住吉名勝記



官幣大社住吉神社

鎮座す此地住吉郡と稱へしを近年東成郡に合

在りて其地を新嘗とあり明治維新以來官幣大社に列せらる

祭神

- 一神殿 底筒之男命
- 二神殿 中筒之男命
- 三神殿 上筒之男命
- 四神殿 息長足姫命

日本紀に曰く

伊弉諾尊既に還りて追ひ悔いて曰く吾前に不須凶目汚穢き處に到る故當に吾身の濁穢しきものを滌ひ去てんとたまひて則ち筑紫の日向の小戸の橋の櫓が原に至りまして祓ぎ除ひし給ふ遂に身の所汚きものを盪滌給はんとして乃ち興言して曰く上瀬は是太だ疾し下瀬は是太だ弱しと曰ひて便ち中瀬に濯ぎ給ふ因りて以て生める神を號けて八十枉津日神と曰す次に大直日神又海底に沈み濯ぐ因りて以て生める神を號けて底津少童命と曰す次に底筒男命又潮中に潜き濯ぐ因りて以て生める神を號けて中津少童命と曰す次に底筒男命又潮上に浮き濯ぐ因りて以て生める神を號けて表津少童命と曰す次に表筒男命凡べて九はしらの神有す其底筒男命中筒男命表筒男命は是即ち住吉大神なり

古事記に曰く

底筒之男命中筒之男命上筒之男命三柱の神は墨江の三前の大神なり

同記に曰く

建内宿禰沙庭に居て神の命を請へり是に教へ覺したまふ狀具さに先の日の如し凡て此國は汝命の御腹に坐す御子の知らさん國なりと爾時建内宿禰白さく恐し我が大神其の神腹に坐す御子は何子かと白せば男子と答へ詔へり爾に具に之を請ふに今此の如く言教へます大神の其御名を知らんと欲りすと白せば是天照大神の御心なり亦底筒男中筒男上筒男三柱の大神なり今寔に其國を求んと思はさば天神地祇また山神及び河海の諸神に悉く幣帛を奉つり我が御魂は船の上に坐させ真木の灰を瓠に納れ亦箸及び比羅傳を多に作りて皆々大海に散らし浮け以て渡るべしと答へ詔へり故備に教へ覺しの如くして軍を整へ船を雙めて渡り幸きし給ふ時に海原の魚

四  
大きき小さを問はず悉く御船を負ひて渡る爾に順風大いに起きて御船浪に従ふ故御船の波瀾新羅の國に押し騰りて既に半國に到れり是に其國王畏ぢ惶れて奏して言はく今より以後天皇の命の隨々御馬甘となりて年毎に船を雙べ船腹を乾かさず舵楫を乾かさず天地の共無退に仕へ奉らんと奏す故是を以て新羅の國をば御馬甘に定め百濟の國をば渡屯家と定む爾に其御杖を以て新羅の國王の門に衝き立て即ち墨江大神の荒御魂を以て國守神として祭り鎮め還り渡り給へり

紀記に書せる趣きかくの如し古人之を詠じて曰く

西の海やあはきが原の汐路より

ト部兼直

あらはれ出でし住吉の神

津守國基

橋の小戸の汐瀬にあらはれて

むかしふりにし神ぞ此神

息長足姫命は神功皇后の御事なり紀記に傳へし事ゆもの大畧を衆めて水鏡に曰く

神功皇后は開化天皇五世の孫にて仲哀天皇の御后なり御心ばへめでたく御容貌世にすぐれ給まへりき仲哀天皇の御時八年と申し、に筑紫にて神この后に告げて宣はくさまくの寶多かる國あり新羅といふ行き向ひ給は、おのづから隨ひなんと宣ひき然るに其事無くて止みにき皇后今日はく天皇神の教へに隨ひ給はで世を保ち給ふ事久しからずなりぬいと悲しき事なり何れの神の崇りをなし給へるぞと七日祈り給ひしに神託宣して曰はく伊勢の國五十餘宮に侍る神なりとあらはれ給ひしによりて皇后浦に出でさせ給ひて御髪を海にうち入れさせ給ひて此事かなふべきならば吾が髪分れて二つになれと曰ひしにやがて二つになりなき即ちみづらに結ひ給ひて臣下にのたまはく軍を起す事は國の大事なり今この事を

思ひ立つ偏に汝たち任す吾女の身にして男の姿を假りて軍を起す上には神のめぐみを蒙り下には汝たちの助けを頼むとて松浦といふ河におはして祈りて曰くもし西の國を得べきならば釣に必ず魚を得んとて釣りし給ひしに年魚を釣りあげ給ひにき其後諸國に船をゆし兵卒を集めて海を渡り給はんとてまづ人を出だして國の有り無しを見させ給ふに見えぬよしを申す又人を遣はして見しめ給ふに日數多く積りて歸り参りて西北の方に山あり雲かよりて幽かに見え侍りと申し、かば皇后其國に向ひ給はんとて石を取りて御腰にさし挿み給ひて事終りて歸らん日此國にして生み奉らんと祈り誓ひ給ひにき此はと八幡を孕み奉らせおはしましたりしなりさて新羅へ渡り給へりしに海の中さまづの大きな魚ども船どもを左右に添ひて大なる風吹きて速かに到る船に隨ひて波荒く立ちて新羅の國の内へたゞ入りに入り來る時に彼の國の王おぢ恐れて

臣下を集めて昔よりいまだ斯かる事無し海の水既に國の内に満ちなんどす運の盡き終りて國の海になりなんどするかと歎き悲しむ程に軍の船海に満ちて鼓の聲山を動かす新羅の王これを見て思はく是より東に神國あり日本といふなり其國の兵卒なるべし我立合ふべからずと思ひて彼王すゝみて皇后の御船の前に参りて今より永く隨ひ奉りて年ごとに貢物を奉るべしと申しき皇后其國に入り給ひてさまづの寶の藏を封じ國の指圖書を取り給ひき王さまづの寶を船八十に積み奉る高麗百濟といふ二つの國この事を聞きておぢ恐れて進み隨まつりぬかくて筑紫に歸り給ひて皇子を生み奉り給ひき是ぞ八幡の宮にはおはします是を胎中天皇と申す明くる年皇后京に歸り給ひしを御まゝ子の御子たち思ひ給ふやう父帝うせ給ひにけり又皇后既に皇子を生み奉り給ひてけり之位に即けんこそは謀り給ふらめ我等兄上にていかで弟に隨ふべ

きとて播磨の明石にて皇后を待ち奉りて傾け奉らんと謀り給ひしを皇后聞き給ひてみづから皇子を抱き奉り給ひて武内大臣に仰せられて南海へ御船を出だし給ひしかばおのづから紀伊の國に到り給ひにき其後御子たち謀反を起し給ひて皇后を傾け奉らんとし給ひしほどに赤き野猪出で来て兄の御子を食ひ殺してき其後次の御子武内大臣と又戦ひ給ひしも亡はれ給ひにき此水鏡にある御まゝ子と申すは鹿坂王忍熊王御兄弟の事なり皇后は攝政六十九年四月に大和の雅櫻の宮に崩じませり御歳百一歳其十月に狹城盾列の陵に葬り奉り後に神功皇后と諡號を奉り又國々に於きて神を齋き祀りて御威徳を崇敬し奉る事となりぬ當社も亦其一なり

御鎮座

當社の御鎮座は神功皇后攝政十一年辛卯四月上卯日御鎮座ありしを以て今に於きて卯月上の卯日に卯の葉の御神事とて嚴なる祭典あり此地に御鎮座の所以は皇后三韓征伐御凱旋の時底筒男中筒男表筒男の三神誨へて宣はく吾が和魂は大津津中倉の長峽に居らしむべし便ち往來ふ船を看んとありしかば其神教に隨ひて此地に齋き祀り給ひしなり後に皇后をも奉祀して四座となれり

文武守護

三韓征伐の御軍を守らせ給ひしを以て軍神と崇め奉る故に社殿の位置三社進みて魚鱗の備へをなし一社開きて鶴翼の圍みを爲すこれを象どり布く陣法を住吉造と稱すとかや又和歌の神と稱して代々の帝行幸あり奉幣使を立てさせ給ひしな

其例多し是は何れの御時に始りしか詳かに知りがたけれど古くより  
證歌あり  
藤原定家

我が道を守らば君を守るらん  
よはひは譲れ住よしの松

和歌浦の道をば捨ぬ神なれば  
あはれをかけよ住吉の波

全 俊成

世に當社および紀伊の玉津島の社明石の人丸社を合せて和歌三神と  
稱ふるも俗説なりとは言ひ難し

斯かれば文武兩道ともに仰ぎ奉るべきは論無し又神の誨へに往きか  
ふ船を見んと宣ひ船路を守らせ給ふこと著しければ船持船積の賈人  
船頭舟子に至るまで常に精心を凝らして風波の難を避け渡海穩やか  
ならん事を祈り奉り出帆歸帆に當社に參詣せずといふ事無し

住吉名稱

古名は大津淳中倉の長峽の浦と稱せり大神御鎮座の後眞住吉ますみ  
よし(又住江)すみのえともいふ

攝津風土記に

住吉大神現れ給ひて天の下を回り住むべき國を覓め給ひ長峽の浦  
に至りて是れを眞に住み吉き所なりと讃め給ひしより眞住吉と稱  
す

とあり又住吉勘文に

住吉と名付くるは眞澄の鏡より出でて眞澄清まことにすみきよし  
といふ義なり

と云へり二説いづれか是なるや又住吉(すみよし)を住江(すみのえ)と云  
ふは近江の日吉(ひよし)を(ひえ)ともいふに同じ俗によい事をえい事と  
稱ふるも是れと同義なり眞住吉の眞は物を譽むる美稱なるべし和歌  
には多く住み吉き事にかけて詠あり

住吉と海士は告ぐとも長居すな

十二 壬生忠岑

人わすれ草生ふといふなり

雁鳴きて

菊の花さく秋はあれど  
春の海べにすみよしの濱

在原業平

神よ神なほ住吉と見そなはせ

太上天皇

我が世に建つる宮柱なり

攝社末社

若宮八幡宮

一の神殿の南に西に向ひたる社なり

祭神

應神天皇

相殿 武内宿禰

應神天皇の御父仲哀天皇熊襲御征伐の軍中にて崩御ありしかば神功皇后御妊娠ながら軍事を督して熊襲を平らげ三韓にかし渡りて國王を降伏せしめ筑紫に凱旋して筑前國宇彌の郡にて皇子を平産

し給ふ是應神天皇なり一に胎中天皇とも申し奉れり

武内宿禰は孝元天皇の曾孫にて屋主忍男武雄心命の子なり應神帝を補佐し奉りし事は世の知る所なり

伊勢皇太神宮遙拜所

一の神殿の北隣の廡下に窓の如く圓き穴を

明け東に向きて拜するやうに設けたり參詣の人此所より伊勢皇太神

宮を遙拜す俗にこれを神明穴と稱す

招魂社 一の神殿の東にあり

世の人の靈魂黄泉に往きたるを招ぎ祭るために建てたる社なり祭

典は春秋皇靈祭の日を以て行へり

銚御前神社

三の神殿の前南向にあり

祭神 武甕槌命

即ち常陸國鹿嶋明神にて春日四座の内なり延喜式に楯原神社とあるは是なり

楯御前神社 四の神殿の前北向にあり

祭神 經津主命

即ち下総國香取明神にて春日四座の内なり楯鉾兩社ともに軍神に

ましくて古は相殿なりしとかや

八所神社

祭神素盞男命楯前御神社と列す

船玉神社

楯の社の西南にあり

祭神

天鳥船命 猿田彦命

海人子神祠

船玉社の南にあり

祭神

葺不合尊 玉依姫

井戸神社

海人子祠の南にあり

祭神

水波野女神

神代記に壺宇玲瓏く門の前の一つ井とあるに由りて井戸の祠と名

づしけなるべし

立間神祠

一の神殿 南長岡にあるを以て長岡祠ともいふ

祭神

天兒屋根命 春日四座の内なり

貴布禰神祠

逆池の南にあり

祭神

高龍神

后土神祠

一の神殿の右にあり

祭神

土御祖神

惣社

神供所の倉の内に三十二神を祭る倉惣字音相近きをもて惣

社といふか

五所御前

若宮八幡の北にあり此所を高天原と云ふいと年古りし

杉の大木

ありしが寛政三年八月廿日大風に吹き倒れたれと續木し

て今は雲を摩づるまでの大樹となれり



國盛神祠 神馬舎の後西向にあり斯主社ともいふ

祭神 津守國盛神

市笑姿神祠 船玉祠の後向にあり

祭神 事代主命

侍者御前 神館殿の前にあり

祭神 田袋見宿禰 市姫

是を地主神と號す

子安神祠 四の神殿の南に北向にあり産靈社といふ

祭神 興台産靈神

苗見神社 猪鼻道路にあり式に多米神社と稱せり

祭神 宇賀御魂神

大海神社 玉手嶋の上に西向にあり式内の神社にして津守の安人

神とも稱ふとぞ

祭神 豊玉彦 豊玉姫

此所を玉手嶋と號す歌枕名寄に玉手嶋は所知れずとあれど社傳には神寶滿珠を藏めし地にて此所を玉手嶋と名づくこと云へり

君がため玉手の岸に和らぐる

津守國平

志賀明神祠 大海神社の北側にあり

祭神 海少童神三座

一説に 彦火出火見尊 豊玉彦 豊玉姫 とも云ふ

生根神社 大海神社の北一町許にあり式内の神社たり奥天神とい

ふ

祭神 少彦名命

國助祠 舊神宮寺の地にあり今主祠といふ

祭神 津守國助の靈

國冬神主の時に種々の靈瑞ありしによりて此祠を建てしといふ  
國基祠 舊淨土寺の内にあり

祭神 津守國基の靈  
國基は歌人にて世に薄墨の神主と稱す

津守國基

うす墨にかく玉章と見ゆるかな  
霞めるそらにかへる雁がね

此歌を詠みしより此名を得しなり

大歳神社 本殿の南一町許に西向にあり式に草津大歳神社とある

は是なり

祭神 大歳神

大歳神は素盞鳥尊の御子にて五穀の神と崇め奉る大歳といふ名に  
よりにて十二月卅一日には大阪堺等の商人參詣する者多し

龍王神祠 大領村の東にあり

祭神 彦龍 姫龍

星の宮 舊名坂之井村にあり

祭神 國常立命

新宮 舊津守寺の門外松林の中にあり

祭神 事解男 速玉男 伊弉諾尊 伊弉册尊

若松神社 澤口村の東半町許に東向にあり

祭神 素盞鳥尊 稻田姫

式に止扨侶支比賣神社とある是なり

舊記に曰く承久三年二月四日若松御所を造り奉る云々とあり社説  
に後鳥羽院熊野御幸の時住吉は其御道筋なれば津守經國若松の林

中に御所を造りて行宮とし奉れりといふ

荒神祠 安立町にあり此地を霞松原といふ

祭神 奥津彦命 奥津姫命 土祖神

山坂神祠

住吉より東北二十町田邊村にあり

祭神 天穗日命 野見宿禰

三十歩神社

平野野堂町にあり式に赤留比賣命神社とあり三十歩

はミソフと訓むにや

祭神 王依姫命

早天雨を祈るに駿あり楡の大樹あり神木と神す

大依羅神社

住吉の東南十四五町許大和川北堤の下依羅村にあり

式に大依羅神社四座大月次相嘗新嘗と見ゆるは此社なり

祭神 大己貴命 月讀尊 垂仁天皇 五十師宮

日本紀に曰く神功皇后九年即ち神の教を得て之を拜禮たまふ因り

て依羅吾彦男垂見をもて神を祭る主と爲し給ふとあり

續日本後紀に曰く承和十四年七月攝津國大依羅社を修理すと云々

三代實錄に曰く大依羅神に従五位下勳八等を授け奉る又元慶三年

六月十四日癸酉使を攝津國住吉大依羅等の神社に遣はし神財を奉

ると見えたり 依羅森 依羅原 依羅里 などをヨサムと詠める歌多し尾張に夜

寒といふ所あれと別なり

君が代はよさむの森の常とはに 定 家

まつと杉とや千たひさかえむ

袖かはす人もなき身をいかにせん 顯 仲

よさむの里にあらし吹くなり

もろともに鳴明したるキリムス 仲 實

よさむの里の草のまくらに

社頭に依羅井あり又依羅池は古き池なり日本紀に曰く崇神天皇六十

二年秋七月乙卯朔丙辰詔のりに農は天下の大本なり民の特みて生

くる所なり多く池溝を開きて以て民業を寛めよと宣ひて冬十月に

依網池を作るとあり又同紀に推古天皇十五年依網池を作るとも見ゆ是は推古の御時に掘り廣められしならん近世新大和川を造りし時此池も小さくなりて今は昔の三分の一なりとぞ土俗仁右衛門池と呼べり

種貸祠

一の神殿の東北にあり

祭神

懷妊を司せらせ給ふ神なり子無き人立願するに必ず驗ありとて後嗣を祈る人多し

かゝる所以あるをもて參詣の男女安産を願ふ者此所の小石を受け歸り安産の後其小石を此所に還し納むる風習となれり

誕生石

社頭猪鼻の邊にあり

薩摩の國主嶋津三郎忠久の誕生せし所なり社傳に云建久元年の春丹後局鎌倉の武將頼朝卿の寵を蒙ること盛にて遂に妊身となりし

神馬舎

一の本殿の北にあり

常に白馬を飼養し神幸の時は供奉に具ふ參詣の人大豆を與ふる風

習となれり又齒切を嚙む人此神馬の豆を三粒持歸りて服すれば瘧

もといふ

文庫一の本殿の北にあり享保八年大阪の書林敦賀屋九兵衛外大阪京都江戶の書林十九氏發起建設し古今和漢の書籍を収集す其後明治維新神官の交迭の際散亂せしを明治七年大阪の書籍商松田正助石田和助等再興し毎年五月二十日大阪書籍商の組合より蔵書の虫干を爲すを例となり歳々新刊及珍書等を組合より奉納する此故を以て十月十七日寶の市に神幸の時先導の猿田彦に出てたつ役は此組合の文庫委員これを勤むる定めなり  
此他堺市内に宿院と稱へて住吉の御旅所あり三村明神九艘明神船松社如意御崎社甲社八祖神祠等あり又堺の東多出井山に方違神祠あり是皆住吉の攝社末社なりとぞ其外に昔はありて今は無きも多し

舊社務家

津守家は天津瓊二杵尊より出づ尊十七世の苗孫田袋見宿禰初めて津守の姓を賜はりしといふ即ち侍者御前といふは宿禰を祀れるなり又攝津志に曰

津守宿禰は火明命の八世大御日足尼の後なり

と見えたり代々住吉大神に仕へて社務と稱へしが維新後宮司と改めらる前宮司國美朝臣まで七十五代連綿として相續あり現今嗣子國榮男爵其家を續がれ宮司を奉職せらる

津守家に功名の人物多し聊こゝに拔萃す

津守國基 康平年中の人なり住吉神主に補して從五位上に叙せらる宏才にして和歌を善くし嘗て歸雁を詠じて薄墨の神主と呼ばる又箏の琴に妙なりしとぞ

紅葉するかつらの中に住吉の

津守國基

松のみひとりみどりなるかな

津守有基 景基 ともに國基の子にて歌の上手なり

津守經國 國基の長子宣基六世の孫なり博學多才にて和歌をよく

す又佛敎を信じ五部の大乘經を書寫し安貞二年二月安居院の聖覺

法印を請じて唱道とし白河女院の御願によりて毎年供養の宿望を

達し神明の奉樂をなし奉られしとぞ

津守國平 經國の子なり歌の名高し

草の名に忘れやしぬるはとゝぎす

五月もとはぬ住よしのさと

津守國助 國平の子文永年中の人

津守宣平 棟國 國冬 國道 女子 皆國助の子弘安年中の人なり中にも國冬秀歌多く撰集に入れり女子は和歌をよくし和琴を彈

くに妙を得て父兄と譽れをともにせり國助の弟の子國顯その子國益共に歌琴の上手なり棟國の子國藤國冬の子國夏ともに元應年中の人にして秀歌多く舞舞を能くす國夏の孫國久應永年中の人に和歌のはまれあり其他なは多し

御祭典

朝御饌 一月一日 四神殿及び攝社末社に神饌を供へ神宮各拜して

歳始を祝賀す

元始祭 一月三日 宮中の式に倣ひて行はる

踏歌 一月四日

御結鎖 一月十三日 弓矢の大禮なり

祈年祭 二月廿三日 としごひの祭なり公事根源に

これは大神宮以下三千一百三十二座の神を祭らせ給ふ其の所のた

しかならざるもあり國々に各幣をつけらる諸國にも年ごひの祭をば行ふなり周禮に祈年は豊年をいのるなりと見えたり神祇官にて行はる辨かねてより諸國のめしものを催しとふ白猪白雞やうのものなり天武天皇四年二月に始めてこの祭わり大かた祈年の祭月次兩度新嘗祭をば四箇の祭とて國の大事とするなり祈年祭の趣きこれにて解すべし當社に於きても最も重き祭典なり地使 是當社の古實たり春の祈年祭と冬の新嘗祭と兩度祭日前に當社の神官大和の畝火に到る畝火山口神社は神功皇后を祀れる社なり地使の神官此所にて裝束し彼所の神官と共に祓を修し山に入りて土を取る其時口に神葉を含み身を清む昔より其土を取る所定めり其所に清冷なる井あり之を汲みて手を淨め土を取ることを三握半此山の神を折りとり土に添へて持ちかへる翌日其土をもて平盆を作り神饌の具とす是神武天皇天香山の地を取り八十平盆を作

らしめて諸神を参らせ給ひし吉例に則とるものなるべし但し當社は天香山に取らずして畝火山に取れるはいかなる故にや知り難けれと古風の存せるは喜ぶべし

卯の葉神事 五月上旬の卯の日

神功皇后攝政十一年四月辛卯の日大神御鏡座の日なるをもて此祭典あり近來堺市龍神町の遊妓等美装して出づる事となれり

御田植神事 六月十四日

神田に苗を植る祭式なり維新前は社務乗車にて出頭し社僧甲冑を着し其法式いと嚴重なり又泉州大津より田樂人來りて藝をなし堺乳守の遊女御田植女となる其裝束甚古風なり植終りて後農民棒うちをなすなど種々古來の習慣と儀式とを存せしが今は改りて大阪新町の藝妓數十名植女となりて田植の式を行ひ後に棒打をなす事のみ昔の名残として見るべし植女の裝束は舊にかはらず紅染の浴

衣に萌黄生絹の水干様の物を着し赤き袴に花笠を被り覆面をなせ

三十

早苗とる御田の植女もいろくの 讀人不知

袖をつらねていはふ今日かな

すみよしの濱田の早苗生ひぬとて 全 上

けふを五月といそぎ取るなり

早少女や汚れぬものは歌ばかり 來 山

早少女や祭のやうにそろひ出る 涼 菟

來山の句は此御田の式には不相應にて普通農家の田うゑの様なり

涼菟の吟は此祭に口號みしならねといとよく叶へり

大菟 六月三十日

神興堺市の御旅所宿院に神幸ましますなり神興を昇く齋住吉松原に來り海邊にて潮に浴して身を清め神興一基を社前に出だし神官

祝詞を奏し神選しありて後神官騎馬にて供奉し堺宿院の御旅所に

至り假宮に遷し奉りて祝詞を奏す深更神興住吉に還幸し給ふなり

大菟は當社に限らず諸社にても行ふなり公事根源に

大菟といふは百官悉く朱雀門に集りて菟をし侍るなり六月十二月

二度あり天武天皇の御時より始まる解除は觸穢などの時もあり神

事を行ふ時は臨時にも常にあれども此の大菟は百官一同に集りて

菟をするなり又今日は家々に輪をこゆることなり

みな月のなごしのはらへする人は

千歳のいのちのおといふなり

此の歌を唱ふるとぞ申し傳へ侍るしかるに法性寺關白の記には

思ふことみなつさねとて麻の葉を

きりにきりてもはらへつる哉

三十一



此の歌を詠すべしと見えたり  
公事根源の文右の如しみな月の、歌は古今六帖に出で、讀人しれ  
ず大神宮年中行事には下の句

ちとせのいのちのふとこそきけ

とあり思ふことの歌は後拾遺集に出で、和泉式部の詠める歌なり  
大板は古き儀式なるが當社は世に住吉の御板を稱へて殊に名高し

神輿洗神事 陰曆六月十四日

神輿一基松林公園を経て墨の江浦へ昇き奉り濱邊に於て神輿洗式  
を行ふ深更に及んで社頭へ還御し給ふ諸人之をお湯と稱し社頭に  
群參し潮湯に浴するものは百病平癒炳然しと云ふ

南祭 八月一日

堺宿院行宮へ神幸し給ふ祭典にして鹵簿の美觀他に見ざる處なり  
七月三十一日は宵宮祭とて賽者群集して徹夜絶へざる大祭日にて

南海高野の兩鐵道會社晝夜臨時列車を増發す又此夜堺大濱に魚市  
ありて賑へり

花摘祭 九月廿二、三、四日

昔は八月八日なりしが中絶せしを近年再興あり種々の花を神前に  
奉りていと美し

寶市 十月十七日

明治三十年十月十七日大阪築港起工式に就きて築港成就海上安全  
の祈禱を當社に行ふ事あり其折から不思議にも松原の路傍叢の中  
に埋れたりし禁裏御祈願所と刻したる石標を見出だせしかば之を  
新に建て且永らく廢れたりし寶の市をも再興する事となり毎年神  
輿松原に神幸あり其祭典儀式を行ふに定りしはいとめでたし當日  
は南地五花街の藝妓上臈の姿に粧ひて神輿の供奉に加はりて賑し  
寶の市は神功皇后三韓を降伏せしめ貢の寶を得たまひし故事によ

りて昔は社頭にて市をたてたるに基つけり從來舊九月十三日大海  
 神社の前玉出嶋にて芝能を奉奏の時謠曲岩船を舞ふ其文句に  
 (道行) 何事も心にかなふ此の時のためしもありや日の本の國ゆ  
 たかなる秋津洲の波の音なき四つの海高麗もろこしも残りなき  
 御調の道の末こゝに津守の浦に着きにけり中畧(ワキ)げに  
 今の御代のありさま治めぬ國もかのづから靡きしたがふ四方の  
 國(シテ)運ぶたからや高麗百濟(ワキ)もろこし船も西の海(シ  
 テ)青木が原の浪間より(ワキ)あらはれ出でし住吉の(シテ)神も  
 まもりの(中畧)長居もめでたき住吉の岸にたからの御船をつ  
 け納め數も數萬のさしげ物はこびいだすや心の如く金銀珠玉は  
 降り満ちて山の如くに津守の浦に君を守りの神は千代まで榮ゆ  
 る御代とぞなりにける  
 是實の市の一證とすべし昔は升を多く賣りしゆゑに升の市とも云

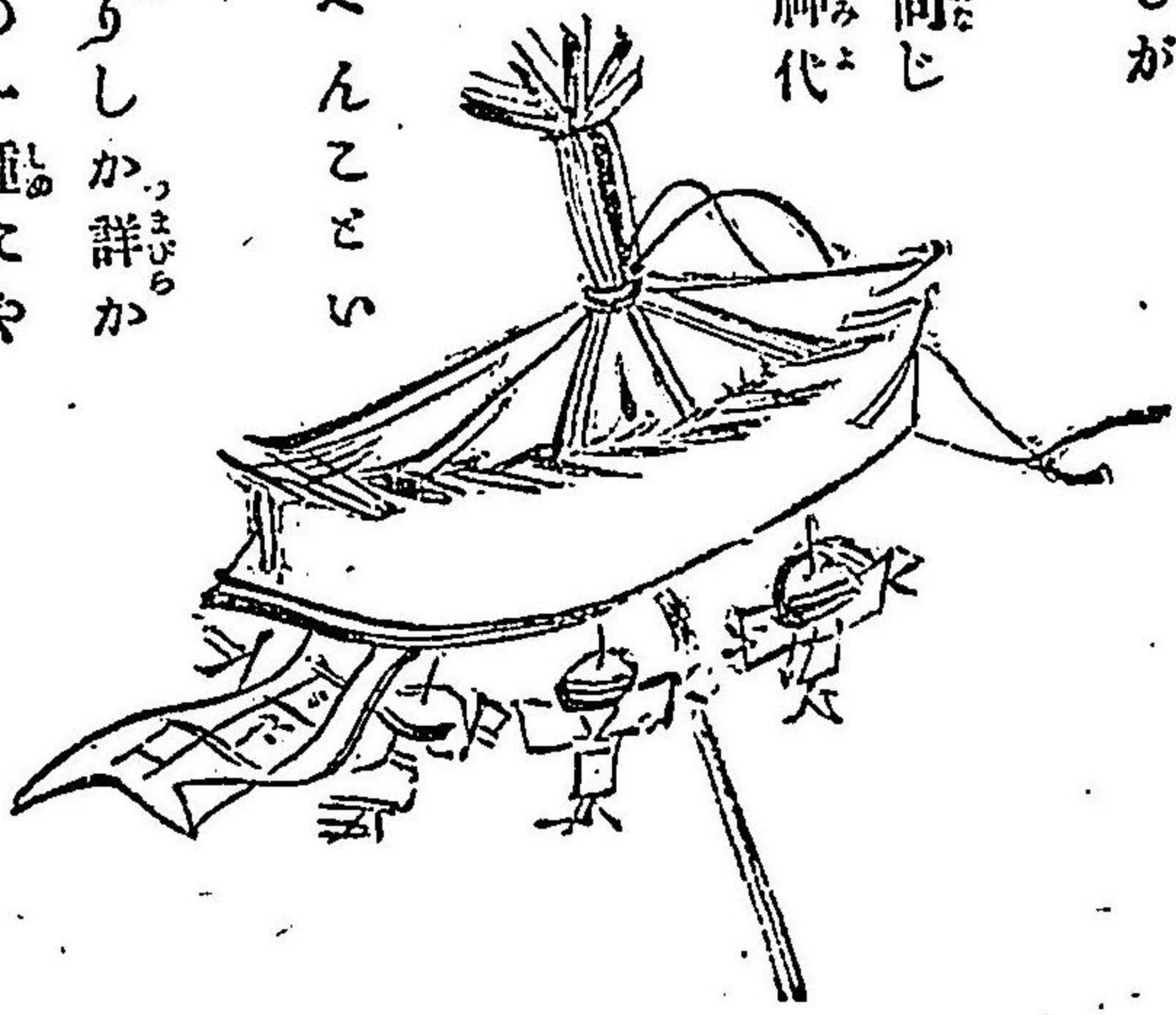
へり其日舊九月十三日にて所謂豆名月なり  
 升買ふて分別かはる月見かな  
 芭 蕉  
 新嘗祭 十一月廿三日  
 今年の新穀を大神に供へ奉る祭式なり春に祈年祭ありて豊年を乞  
 ひめでたく秋獲を得て瑞穂の稻を神に奉る新嘗祭これなり公事根  
 源に  
 新嘗會は神今食に同じ葉手の數十三なり其外はかはらずこれは今  
 年の初稻を神に奉らせ給ふ義なり代のはじめには大嘗會といひ年  
 毎のをば新嘗會とまうすなりト食の人々摺衣日蔭を着す用明天皇  
 二年四月より新嘗の事は始まる大かたは神代より事起れり日本紀  
 にも天照大神にひなへ聞こし食すと見えたり  
 當社も此祭殿にして神供の平瓮を作るに其土を大和の畝火山に取  
 ること祈年祭に同じく其式今に存せり又延喜式に相嘗祭の神七十

一座と見えたるを神祇令には大倭住吉大神、穴師、恩智、意富、葛木、鳴、日前等の社に相嘗祭を行ひしが近頃絶えたるよし記せり

大祓 十二月卅一日 祭式六月に同じ

六月の件にもいへる如く身漕祓は神代の遺風にて悪しき穢れを拂ひ除きて善きに清みかへる事なれば年の終に一年中の禍災をすくぎ拂ひ清潔なる身心となりて新しき年を迎へんこといとめでたし

住吉踊 古來此名あり何れの時に始りしか詳かならねど彼の御田植に戯れし田樂の一種にやあらん其姿各々菅笠の縁に紅巾を垂れたるを被き白布を着て手に



團扇を持ち中に一人大傘の縁に紅巾を垂れしを持ち割竹もて歌をうたへば其周圍を回りながら踊る其拍子毎に

住吉様の岸の姫松めでたけれ と囃すなり昔は市中を踊り歩行しが近頃は止みたり

名勝古跡名物

松林 社頭の西濱邊に至るまで一帯の松林あり翠碧滴る如く四時色をかへず風景花紅葉にも勝れり今は公園となりて茶店酒舗浴室均掘各所に散在し遊客の絶間なし宴會運動會自轉車の競争はしりごくなむいづも賑へり

住吉の神木の中に松を第一と賞することは崇神天皇の御時三柱の大神高天原より天降り給ひ墨江浦に影向の節三本の松忽然として一夜に生ずこれ即ち大神降臨の瑞木にして永く住吉に鎮座し給ふ前表なり其時天皇使を住吉に遣はして其靈瑞を見せしめ此所に祭

住吉公園之大鳥居



住吉名勝記

り給ふ是より其松に木綿を掛け注連繩を引けり今所謂影向石の地  
それなりと言ひ傳ふ住吉勘文に

松林の下久しく風霜を送る

と云へるも是なり然かありしより以來或は歌に詠し詩に賦し住吉  
の松を賞讃せずといふ事なしされば古今集の序にも

たかさごすみのえの松もあひかいのやうに覺え

と書かれ萬葉集にも

すみの江のさしの松原遠つ神

我がおは君のいでましとて

と詠めり

そもく松は其精變じて青牛と化し又伏龜となる其實を食へば長  
壽を得と又松樹三千歳なるものは其皮の中に聚脂あり狀龍の如し  
號けて飛節之といふ或は伏若龍骨を生すとぞ

住吉名勝記

住よしの松も花咲く御代にあひて

權中納言為教

十かへり守れしきしのまのみち

君が代の久しかるべきたゆしには

津守氏人

かねてぞうゑし住よしの松

從三位行尹

漕ぎ出で、武庫の浦より見渡せば

波間にうかぶすみ吉のまつ

源三位頼政

住吉のまつのみまよりながむれば

月落ちかゝる淡路しまやま

住吉停車場 大阪より又和歌山と堺より關西鐵道の便をかりて上下

の客の集ひ合ふ所なるを以て其賑ひ言はん方なし信心の月参り卯日

詣船手の出帆入津商賈繁昌海上安全あるは安産縁結び其祈願は様々

なれを靈験にかはりはなかるべし中には詩歌俳句を献詠し濱邊の風

光を賞する風流客もあり本社大盃となりて藝妓舞間の末社に取り巻

かる、自稱粹もありとに、かくに此繁榮は皆大神の賜にこそ  
住吉東停車場 阿部野街道の東に在り、南は長野、北は大阪沙見橋に  
至る

三忘 妄草 忘水 忘貝 これを住吉の三忘といふ

忘草は古今集の傳授なくては容易く知ること能はずといへども世  
俗には萱草をわすれぐさと云へり萱草は小き塊根にて春宿根よ  
芽を生ず若きは甘くして食ふべし葉は燕子花のやうに長く叢生  
れども嫩らかに薄くして先の方靡き垂る夏に長き莖を出だし枝を  
分ちて花を開く單瓣複瓣二種あり花形鬼百合の如く紅黄色なり  
歌に詠める忘草は必ず萱草にもあらじたゞ住吉に生へる何草をも  
いへるにて一種忘草といふものあるには非ずやと思はる

道しらばつみにも行かん住の江の 紀 貫 之

さしに生ふてふ戀忘れぐさ

忘ぐさ摘みてかへらん住吉の 平 棟 仲

さしかたの世は思ひ出もなし  
紀のよしさな住吉の浦に行きて忘草を尋ねければ美女に逢へり來  
會を契りて別れけるに後の日行きけるに彼の女來らずつれづれと  
してある所に蛙のあもみ行く跡を見れば歌なり

すみよしの濱のみるめも忘れねば

かりにも人にまた訪はれけり

忘水 淺澤小野の細き流れをいふかど古人疑ひおきたれども亦何

れの水と指せるにはあらざらん

すみよしの淺澤小野の忘水 讀人不知

絶えなくならで逢ふよしもがな

人も皆結ぶなれどもわすれ水 源 頼 政

われのみわかぬこゝちこそすれ

夏虫のかげみし澤の忘れみづ 定 頼

忘貝

思ひ出でて身はこがれつゝ

これまた一種の貝にあらじたい濱邊なるをいへるならん  
いとまあらば拾ひに行かん住吉の 讀人不知

きしによるてふ戀わすれ貝

墨の江に行くといふ道に昨日見し 同 上

こひ忘れ貝ことにし有りけり

土佐日記二月四日和泉の灘の段に

此の泊の濱にはくさくさのうるはしき貝石なご多かりかればた  
い昔の人をのみ戀ひつゝ船なる人のよめる

寄する波うちもよせなん我がこふる

人わすれ貝おりてひろはん

といへればある人堪へずして船の心やりによめる

わすれ貝拾ひしもせじ白玉を

同記五日の段

こふるをだにも形見と思はん

住吉のわたりを漕ぎ行くある人のよめる

今見てぞ身をば知りぬる住の江の

松よりさきにわれは經にけり

こゝにむかしつ人の母一日片時も忘れねば詠める

住の江に船さしよせて忘草

しるしありやと摘みて行くべく

となんうつたへに忘れなんどにはあらで戀しき心地しばし休めて  
又も戀ふる力にせんとなるべしかく言ひてながめつゝ來る間にゆ  
くりなく風吹きて漕げきもく後へ退きにしどきてほとくしく  
うちはめつべし楫取の曰く此の住吉の明神はれいの神ぞかしはし  
き物ぞおはすらんとは今ゆくものかさて幣をたてまつり給へとい

ふ言ふにしたがひて幣たてまつるかく奉れどもはら風やまでい  
や吹さにいや立ちに風波のあやふければ楫取また曰く幣には御心  
のめかねば御船も行かぬなりなほうれしと思ひ給ふべき物たてま  
つり給へといふ又いふにしたがひていかはせんとて眼もこそふ  
たつあれたいひとつある鏡をたてまつるとて海にうちはめつれば  
いと口惜しさればうちつけに海は鏡のごとなりぬれば或人の詠め  
る歌

ちはやぶる神の心をあゝ海に

かゝみを入れてかつ見つるかな

いたく住の江の忘草さしの姫松なといふ神にはあらずかし目も  
つらく鏡に神の心をこそは見つれかちどりの心は神の御心なり

けり

白鷺 社記に當社の神使とす彼の越前の敦賀の八幡宮の森の口碑に

傳へて曰く神功皇后の御時外國より日本を攻めんとて敦賀の海邊  
に軍艦をさし向けしに八幡の森の梢に無數の白鷺あつまりしかば  
遠くより見るに白旗おし靡ける如くなりし故にさては此森に防禦  
の兵卒數萬ありと恐れて逃げ歸りしと云へり神功皇后に因みある  
當社なればかゝる事より神使といふにや壽永中源平の亂の時に常  
社より白鷺飛行して鎮西に越きしと云ひ傳ふ

橘樹 本殿北の方にあり社傳に神功皇后新羅を征し給ひ彼國降伏の  
後八十艘の貢物を献することゝなれり橘も其貢の一なるをもて當  
社に植ゑしなりと云へり

按ずるに橘は時じくの香具の木の實と稱へて垂仁帝の御時に但馬  
毛利といふ人常世の國に至り此果木を得て歸り來りし事史に見え  
たり

便の水 社頭の御手洗をいふ是は當社に限らずいづくの神社にもあ



嘉應二年十月住吉社歌合に社頭月をよめる

月かげはさえにけらしな神垣や

よるべの水につらゝゐるまで

清輔朝臣

往合の森 社頭の森をいふ歌枕名寄に

風かよふかたへに露やこぼるらん

中務

夏と秋とのゆきあひのもり

往合の橋 いづれか詳かならず俗説には住吉街道新家の北にある橋

なりといふ

楠樹 本社の東にあり奇らしき大木なり

太平記に延文四年四月十二日午の刻住吉の神木大樹の楠風も吹か

ざるに中より折れて神殿に倒れかゝりしよし神主津守國久南朝へ  
密奏す諸卿不吉の表事なりと眉をひそめけるよし見ゆ此木とは別

なるべけれと當社の神木に楠をも數ふる證とはすべし然して現今  
は楠瑠神社と崇め奉る

知利也多羅里 一の神殿より巽の方一町許に溝あり其流の音チリヤ

タラリと聞ゆと今はなし

鶴の橋 社頭石舞臺の東の石橋をいふ其名義不詳

百人一首に大伴家持の歌とて

かさゝぎの渡せる橋におく霜の

白きを見れば夜ぞふけにける

此の鶴の橋は禁中の陸級をいふなりと諸註に云へり

駒止石 社の四方にありこれより乘馬を禁ず

今は皇族下乗等の制あり

長峽の橋 西の鳥居馬場先長峽の浦にあり

三廢寺 堂塔礎々たりしも今は廢して礎石の跡わづかに存せり其三

宇は神宮寺津守寺淨土寺なり昔の参考のために左にしるす  
 神宮寺 舊號を新羅寺といひて天台宗東叡山に屬せり天平二年孝  
 謙天皇住吉大神の靈告によりて建立し給へりとぞ  
 本尊 高麗佛の藥師如來にして昔より秘佛と唱へ開扉せし事なり  
 兩檀の日光佛月光佛四天王十二神將等は定朝の作なり  
 西常行三昧堂 阿彌陀觀音勢至の三尊を安置す  
 東三昧堂 釋迦文殊普賢の三尊を安置す  
 二層塔 東西に兩塔あり金剛界胎藏界大日如來四天王を安んず前  
 に寶池の圖後に觀座文珠の像塔中柱の繪は雌雄の龍各變態あり兩  
 扉十二天其外佛殿後壁の畫兩塔とも極彩色狩野山樂の筆なり  
 法華會舞樂石舞臺 今主祠 共に僧坊の西にあり  
 求聞持堂 本尊虚空藏菩薩并に四天王二童子ともに山樂の筆  
 五大力菩薩像 寶藏に安置す俗傳に住吉明神松葉をもて畫がら給

ふとぞ  
 什寶 五色佛舍利 五部大乘經紺紙金泥にして帙は編竹を以てす  
 白河女院の御願にして津守經國の書寫する所なり大般若經細書六  
 百卷全部光明皇后御筆とぞ 法華經八卷細書弘法大師の筆 興正  
 菩薩袈裟其他なほ數品あり  
 元享釋書に 承平七年十一月廿一日明達に勅りして住吉神宮寺に  
 於いて純友を伏す云々とあり  
 津守寺 神宮寺の罪にあり瑠璃寺ともいふ延喜元年の建立なり住  
 吉社と共に造替あるなり  
 本尊 藥師佛津守の浦より出現す勝士不動毘沙門  
 講堂 本尊觀世音は春日佛師の作 鎮守 辨財天  
 朝日山莊嚴淨土寺 神宮寺の東にあり眞言宗 白河院の御時應徳  
 元年津守國基の創建にて文應元年興正菩薩の再興なり

本尊 不動明王弘法大師の作 辨財天定朝の作左は弘法大師右は  
興正菩薩

告磧石 寺傳に曰く津守國基當寺を建立の時紀州和歌の浦より礎  
石を求む出船の時に風波穩やかならずして運送滞ほりければ國基  
和歌一首を詠じて玉津島明神にたてまつる

年ふれを老もせずして和歌の浦の

いく代になりぬ玉津しまひめ

夜半に天女出現まし〜海上風波靜かにして思ひのまゝに巨石を

送ることを得しかば是和歌の感應のしるしにやと人々申しける

もと當山は古寺にして朱雀帝の御宇天慶三年將門純友誅討の時當

寺の尊像に祈り其効を得たり其後國基詔を受けて再興あらんとて

地を開く時三尺有餘の金札を掘り出だせり其銘に

七寶莊嚴極樂淨土云々とあり之に因りて都卒の内院に表し境内方

八町として勅願所となれり其後十三年を経て堀川院の御宇永長元  
年三月勅使延尉宮道式賢卿講師横川慶朝僧都讀師西塔宗心阿闍梨  
等開眼供養あり諸堂巍然として莊嚴炳焉たり星霜かさなりて今は  
形ばかりの寺となれりと言ひ傳ふ

此の寺傳をもて考ふるに國基再建供養の時さま封境の地なを神  
宮寺と一雙の地なりしならん昔に比すれば衰へしとはいふものゝ  
維新前までは存せしに維新後に至りて三寺とも廢して今は跡だに  
知る人なくなりしはいと惜むべし

墨の江 本社より一町許巽に入江ありしが今は埋れて田となれり字  
を藍中田といふ

馬のあゆみおしてとゞめよ墨の江の

さしの植生に匂ひて行かん

住の江のまつほと久になりぬれば

豊 繼

兼 覽 王

あしたづの音に鳴かぬ日はなし  
守るなる神につけても住の江の

國道

波には道をおもひやはせぬ

俊成

思ひ出よ神代も見きや天の原

そらもひとつの住の江の岸

住吉細江 安立町の北に流る細江川の下流にありいづれか詳かなら

すといへども其所と指すにはあらざるべし

相摸

住吉の細江にさせるみをつくし

ふかさにまけぬ人はあらじな

住よしの細江の蘆も霜枯れて

よそにもしるさみをつくし哉

すみ吉の細江こぎ出づる蟹小舟

あしまあらをふ夜半の月かけ

宗吉

顯昭

住吉浦 すべて當社の浦をいふ社頭反り橋より西の方松原の極端に

名高き高燈籠あり登りて眺むれば攝河播阿淡泉紀の海洋山峯一眸

の内に入り殊に淡路島は手に取る如く月落ちかゝるの歌を自ら詠

誦せしむ

住吉の浦の玉藻を結びあけて

元輔

なぎさの松の蔭をこそ見ゆ

すみよしの浦風いたく吹きぬらし

惠慶

岸うつ波のこえしきりなり

住吉のうらに吹き上る白波ぞ

一條右大臣

汐みつ時のはなぞ咲きける

住吉岸 すべて此邊の岸をいふ今住吉街道の東手の岡に岸の姫松と

いふ名残りたれど彼處に限るにあらず

我見ても久しくなりぬ住吉の

證人不知

さしの姫松幾世經ぬらん

白波の千重にきよする住よしの

車持朝臣

岸のはにふに匂ひてゆかな

住吉のさしの白波よるくは

讀人不知

あまのよそめに見るぞ悲しき

住よしの岸の藤浪わが宿の

平兼盛

まつの梢に色はまさらじ

すみ吉のさしもせざらん物故に

讀人不知

ねたくや人にまつといはれん

住吉のこすの常夏それながら

定家

さし野のくさの花も忘れず

夕さればにしきと見ゆる住よしの

右大臣

岸野のはぎを洗ふしら浪

住吉岸田 濱田また小田なども詠めり社頭の神供を作る所を御田と

いふ古歌によめるは御田をさしていへるにあらず

住吉の岸を田にはり蒔きし稻の

人麿

しかも刈るまであはぬ君かも

松かげの水せさいれて住吉の

宗長

さしの上田に早苗とるなり

住よしの岸田の春のわか草に

爲家

たなれのことまは立ちも離れず

すみ吉の淺澤水のたえくに

同上

岸のあら田は種まきにけり

古歌によめる上の如し其岸田も今は岸にあらで人家も建て連りたり

り彼蜀山人が

住吉の新田ふえてとしくに

あどすさるする岸の姫まつ

と戯れしはげにさる事なりされば業平朝臣が春の海邊にといひし浦もおひくりに西の方に遷りしなるべし舊曆三月三日は沙干とて遠近社に詣で浦邊に出でて男女小兒皆衣の裾をからげ遠く沖の方まで蛤をあさり歩行きうらゝかなる風景に歸路を忘るゝも興あり

青柳の泥にしだるゝ沙干かな

芭蕉

上り帆の淡路はなれぬ沙干かな

去來

舊六月十四日は神輿洗神事の日なり俗にお潮湯とて海水浴をなす最と賑はし

住吉の津 古歌に聞こえず日本紀に曰く

雄畧天皇十四年正月身狭村主青等ともに吳國の使人吳の献つる手末才伎漢織吳織および衣縫兄媛弟媛等を將て住吉の津に泊ると見えたり

住吉岡 社より北一帶をいへるならん  
住よしの岡の松笠さしつれて

資 視

住吉里 北は勝間より南堺をかけていへり

すみ吉の里を得しかば春花の  
まゝめづらしみ君にあへるかも

讀人不知

都には住みわびはてゝ津の國の  
すみよしとさく里にこそ行け

忠 見

住吉池 勘文に墨江池の南に大年の社ありとあれば御田の南手字蘆中と唱ふる沼田は此池の跡ならんか今は池の形も無し

五月雨の住の江殿に日を経れば  
うみより池にかよふ白なみ

慈鎮和尚

あつさをば松の嵐におさめ置きて

全 上

秋をうかべるすみの江の池  
暮の秋住の江の池に來て

全 上

なみ間の月にこゝろ澄しつ

津守浦

住吉浦の一名なり

神代よりつもの浦に宮居して

隆

今朝見れば雪もつもの浦なれや

濱まつが枝の波につくまで

慈

大船の津守のうらにのらんとは

まさしに知りて我が二人ねし

大津皇子

君が代はつもの浦に天くだる

神もちとせを待つとこそ開け

俊 惠

月影の雪も津守のうらかせに

左 大臣

なほ秋さむし住よしのまつ

たのめつゝ來ぬ夜津守のうらみても

忠 慶

まつより外のなぐさめぞなき

長居地

住吉の東寺岡田邊の邊にありしといふ勘文に長居宿苗見明

神とあり

すめらぎの長居の池に水澄みて

常 陸

長居浦

社説に水源長居池より流れて細江川といふあり其下流海に

入る所を浦曲りといふ長居の浦は其所なりと云へり契冲吐懐編に

長居浦は萬葉には備後國とあれど古歌大体住吉によめり

霜さえて小夜も長居の浦寒み

あけやらすどや千鳥鳴くらん

法印 靜賢

嵐吹く生駒の山のくもはれて

國 信

ながみの浦にすめるつきかげ  
沖津波たちわかもとも音にきく

崇徳院

長居のうらに舟なといめそ

慈鎮

君が代の千年くらべをせさせばや

ながみの浦の松と鶴とに  
秋の夜の長居のうらによする波  
かへるくぞねためられける

兼昌

君が代をながみの浦にゐる鶴も  
よろづ代までと聲きこゆなり

丹後

長居濱 浦と同じ所なり

君がよは長居の濱のうら千鳥  
むかしの跡にけふやあひ見ん

常盤井入道

きみが代は長居の濱のさいれ石の

顯綱

いはねの山となりはつるまで  
君が代はながみの濱にゐる鶴の

讀人不知

濱松岸 藻蘆草に攝津國とあり津守新田に濱松堤といふ名ありとぞ  
けふことに幾年なみをすぎぬらん

俊成

出見濱 社説に住吉の松原を直路に出で、海を見る意なれば今の松  
原の濱にて所謂長峽の浦是なりと云へり夜間目的の高燈籠は神徳  
と共に光り輝きて海上安穩の守りとなれり

柿本人麿

住吉のいで見の濱のしばなかりそね  
少女等が赤裳の裾の濡て行かん見ん  
夏はまた出見の濱に住よしと

内大臣



家 隆

眞柴折りしき誰が涼むらん  
秋の夜は月の光もすみよしの  
出見のはまのありわけの空

粉濱

今の字中在家村の海べなりと云ひ傳ふ又一名を粉洲とも稱せ

讀人不知

住吉の粉濱の蜺あけも見ず

定 家

住よしの粉洲の常夏咲くも見ず  
かくれてのみやこひ渡るらん

楯が崎

社頭に楯御前の社あり今いづことも詳かならねど名寄の歌

廬 主

うつ波に満ちくる汐のたゝかふを  
楯がさきとはいふにぞ有ける

住吉名勝記

浅澤

本殿より二丁許巽にあり古來燕子花の名所なりしが今は僅に

小池を存す

住吉の浅澤小野のかきつばた  
讀人不知

さらぬだに浅澤をのゝ忘れ水  
津守經國

五月雨に浅澤沼の花かつみ  
願 仲

住吉のあさ澤水に影みれば  
津守國助

下萌やまづ急ぐらん白雪の  
爲 家

いさや子等若菜つみてん根芹生ふる  
俊 成

此後澤小野といへるは大蔵神社細江の南のはとり東の田圃になれ  
る所ならん  
あさ澤小野はさとしはくとも

後村上天皇行宮跡 正平七年足利義詮伴りて南朝に降る後村上天皇

之を聴し給ひ同年二月廿六日吉野賀名生の宮を出でて住吉に行幸

し社務津守國夏の館を行宮せしたまへり

今上聖趾 明治卅一年十一月十五日大演習の際住吉の北手塚山の邊

にて暫時御休憩ありし事あり

慈恩寺 住吉社の東にあり

本尊 十一面觀世音は聖德太子の御作なり

車返しの櫻 後醍醐天皇住吉行幸の時此櫻を賞し給ひ還御ならんと

して再び御車を返し叙覽ありしより此名をかひたるは櫻の名譽な  
らずや

子安地藏 大蔵社の西南にあり天臺宗松野山地藏寺と號す本尊地藏

菩薩は長六尺許の靈像なり

牀菜菘古跡 舊名坂の井村にあり紫野一休和尚しばらく此所に假居

ありしといふ今荒廢して無し

鷲住王古跡 淺澤の南手にあり日本紀に

履仲天皇六年二月御魚磯別王の女太姫郎女高鶴郎女を後の宮に召

し納れて並に嬪とし給ふ是に二人の嬪恒に歎きて悲しきかな我が

兄の王いづちに去り給ひしにやと曰ふ天皇その歎きを聞こしめし

て汝何をか歎くぞと問ひ給ひければ妾が兄鷲住王人と爲り力強く

て輕捷し是によりて獨八尋の屋を馳せ越えて遊行きし既に多の口

を経て相面言ふことを得ずそれ故に歎くなりと對へまうしき天皇

其力強きを悦びたまひ之を呼びに遣しけれと參り來すまた使を重

ねて召せども猶參り來す恒に住江邑に居れり是より後は廢めて求

め給はずなりぬ是誠岐國造阿波國脚咋別すべて二族の始の祖なり  
と見ゆ天皇の召にも應せざりしは富貴に心を動かさざりし人と想  
ひ像る

王子祠 舊津守寺の南にあり熊野若一王子を祭る後鳥羽院御幸記に

曰く

京師東山若王子社より熊野まで九十九所の王子祠を建て御幸の御

休憩所とす

熊野社人の説に九十九所の王子祠はすべて熊野権現伊弉册尊なり

と又一説に若一王子と申すは天照大神を祭り奉るなりとぞ

湖崎

正面の鳥居反橋の邊より南の方安立町までの古名なりといひ

得ふ

難波屋笠松 安立町難波屋の庭にあり四方に葢覆して笠の如く現今

に至る迄表色をあらはさずいよ／＼築へり

叡松原

安立町といふ昔は皆松原なりしとぞ後世安立といふ人これ

を開きて町となせり尙残りたる松七本ありけるも後亦畑となして

字を七本松といふ三寶荒神の社あり前に記せり

霞うつあられ松原住の江の

長皇子

小夜ふけて霞松原住よしの

知家

うら吹く風に千鳥鳴くなり

うら風のあられ松原吹きまどひ

玉よせかぬるすみの江の波

冬も今日數つもの浦さえて

雪にもなりぬあられ松はら

或説にあられ松原は疎々とある松原にてあら／＼松原といふ義なれ

ば住吉に限るべからずと云へり

僧正行意

定忠

遠里小野 安立町の東にあり遠里小野またウリノともいふ古歌に多

くよめり

住吉のとはざと小野の真萩もて

すれる衣のさかりすぎゆく

真萩ちる遠里をの、秋風に

はなすり衣いまや打つらん

歸るさはとほざと小野の櫻がり

花にやこよひ宿をからまし

遠里小野村は莖莖子油を絞り初めし地なりそれまでは皆在胡麻油のみなりしを當村に莖莖子を絞り出だしけるより天下皆これに倣へりこの故をもて住吉神燈の油は當村より献する例となれり夫木

集に 待つよひは遠里小野の油うり

讀人不知

つらきは今朝の皮かうの聲

極樂寺 遠里小野村にありいにしへは魏々たりしが今は小庵となりて女僧住めり

本尊 毘沙門天 長三尺許あり寺説に和州志貴山の本尊と同木なりといひ傳ふ

楠公寄附石燈籠 高一丈許あり建武三年三月楠正成建といふ文字かすかに讀まる其餘は磨滅して見えすされと好事の人は皆此寺に尋ね來て之を賞すこれを一見するにたい五百年前の古色はあれど格別に妙作と稱するに足るものにあらす特楠公の姓名を勸しあるが爲に何と無く懷舊の情起りてなつかしされば其物よりも其寄附せし人に由りて殊更に感あるものなりと思ひ知らる

朴津 遠里小野の南に朴津谷また朴津寺の舊跡に礎あり住吉社説に住吉六郷の一なりと云へり朴津村東に移りて今は名のみ残り昔

は朴津海といひて風光の地なりしかば古詠あり

七十

墨の江の朴津にたちて眺れば

高市黒人

武庫の泊りもいづる舟人

能因法師

足引の山のたかねに登りてぞ

朴津のうみは近く見えける

吾彦 住吉より巽十八町許にあり今は吾孫子村と稱す日本紀神功皇后の巻に依網吾彦男垂見また仁徳天皇の巻に依網屯倉阿弭古といふ人あり攝津名所圖會に萬葉集には網子海と詠す攝津國二十一首の中にあり

時津風ふかまく知らず阿古の海の

讀人不知

あさけの潮に玉藻かりてな

阿古行宮は日本紀に持統帝六年五月阿古の行宮に御し給ふ時に贊を進む

と記したれど此阿古は吾彦の事なりや詳かならず  
大聖寺 吾孫子村にあり吾彦山中坊不動院と號す眞言宗にして中興開基盛長法印なり

本尊聖觀音 長一寸八分

長一尺八寸 僧正行基の作 泉州泉南郡水間の瀧より出現御正体は

藥師堂 本尊藥師日光月光

護摩堂 本尊金色油不動明王 智證大師筆なり

大師堂 弘法大師を安す 五福天祠 吃枳尼天 大黒天 毘沙門

天 聖天 辨財天とも

牛頭天皇社 此地の生土神なり 聖徳太子御作

楠正成像 楠公旗 同劔 其他なは數々あり 鎮主 神功皇后を祭る 什寶に

當寺の觀音は厄除と稱し參詣常に絶ゆること無し殊に毎年節分に

は群參雜沓す近頃高野鐵道の停車場を當村に設けしより一層參詣

七十一

の便利を得て賑はし  
新大和川 水源和州より流れ來り住吉の南にて海に入る此川に架す  
るを大和橋といふ長さ四十丈堺市北の入口にて紀泉二州の街道な  
り又南海高野鐵道の線路にて堅牢の鐵橋を架せり  
住吉神興火替所 大和橋北詰にあり

六月三十日堺宿院へ神興渡御ありて還幸の時堺の人此所まで送り  
奉り是より住吉の生土人昇きて社壇に納め奉る例なり  
淺香浦 泉州船堂村の邊なれど古詠住吉に縁あればこゝに出せり聖  
徳太子の御時淡路國より名香を奉る太子此浦にて香氣を試めし給  
ひしといひ傳ふ

夕ざれば沙漏ちきなん住吉の  
あさかの浦に玉藻刈りてな

弓削皇子

住よしの淺香の浦のみをつくし

行能

さてのみ下に朽ちや果なん  
玉藻かる方やいづこを霞たつ

爲明

今淺香山と稱ふる小丘ありて稻荷の社名高し

住吉新家 昔は伊丹屋三文字屋なといふ繁昌の料理屋ありて仲居女  
は皆赤前垂を着くる例なりしが今はなしたゞ變らぬは名物の蛤  
蒸甘薯 ころく煎餅 麥蕨細工 土人形 青苔海等を賣る店多  
し

天下茶屋村天満宮 住吉街道にあり

祭神 菅公 此森を紹鷗の森といふ茶人武野紹鷗此所に住みしと  
いふ紹鷗は千利休の師なり

當村に天下茶屋と稱ふる家ありて  
今上陛下住吉行幸の御時御小憩ありし事あり又昔豊臣秀吉公も御

入りありしと云ふ又和中散といふ薬を賣りし家も天下茶屋是齋と稱へしが今は無し

天下茶屋停車場 天下茶屋の北に在り  
別格官幣大社阿倍野神社 天下茶屋の東南にあり

祭神 北島中納言源顯家卿 前

准后親房卿

卿は正二位大納言北島准后親房卿の長男なり元弘三年陸奥の國

司兼鎮守府將軍となる建武三年の春賊足利尊氏京師を陥るを

以て後醍醐帝叡山に行幸し給ふ卿新田義貞楠正成等と共に之を京師に敗り逐ふて攝津

豊島河原に戦ひ賊を西海に走らしむ是に因りて詔りして卿を征夷



將軍とす同三月中納言に任じ又鎮守府大將軍を拜して任國に下る其後帝南狩の時卿靈山の城に在りて急に軍士を徴し率ゐて賊と上野の利根川に戦ひ遂に鎌倉を陥し進んで美濃の黒血川に至りしに力戦利あらず伊勢を経て南都に屯し般若坂に戦ひしが又利を失ひ敗卒を集めて堺浦に至り遂に軍を進めて阿倍野に戦死す時に延元三年五月二十二日なり帝いたく悼惜あらせられて從二位を贈り給へり

顯家卿の御父北島准后親房卿は具平親王の苗裔大納言師重卿の子にして村上源氏なり後醍醐天皇に仕へ奉られしが足利尊氏の叛逆によりて天皇吉野の宮に遷らせ給ひ延元四年八月十六日崩御まし

幼少なりしかば親房卿先帝の遺詔を奉じて政を補佐し身は東藩に在りながら職原抄を撰みて奉られ後吉野に在りて忠勤を盡されけ

れば其徳を欣慕仰讃して蜀漢の諸葛武侯に比せり若はす所の神皇  
正統記は歴史の一部として世人皆之を貴べり

願家卿墓 阿倍野にあり

一株古松の下に建てる石碑行

人をして涙を漲がしむ土人は

これを大名塚と呼びなせり

小町塚 大名塚の傍にあり由縁

詳かならず徒然草に

小野の小町が事ははめてさだかならずおと

ろへたるさまは玉造りといふ文に見えたり

此ふみ清行が書けりといふ説われ高野の

大師の御作の目録に入れり大師は承和のは

じめにかくれ給へり小町がさかりなること其後のことにや猶おほ



つかなし

とあれば此小町塚もたゞ土人の呼びならはしたるものなるべし此

邊に播磨塚萱草塚松蟲塚などありすべて官女などの墓なるにや萱

草は官女の謬りなりといふ説あり

經塚 小町塚の傍にあり

土人曰く聖徳太子一石一字の經を書寫してに埋めたまひしと云

傳へたり

兼好法師古跡 阿倍野と天下茶屋との間字丸山といふ所に石の寶塔

あり昔吉田の兼好法師亂を避けて阿倍野の命婦丸が許に寄留し菴

を織りて其生計を助けし跡なりと口碑に傳ふ扶桑隱逸傳に曰く

兼好は卜部兼顯の子にて大職冠の苗裔なり博覽にして窺はざる所

なし能く和語を綴り巧みに和歌を作る時の人論じて少しく俳體あ

りとす嘗て後宇多帝に仕へて武衛の次將と爲る正中元年帝昇遐し



給ひしかば兼好乃ち髪を削りて修學院に入り後横川に上りて深く影迹を匿せり兼好常に清貧にて若き時より頼阿と友とし善し嘗て米および錢を頼阿に乞ふとて折句の歌をもて其意を見す頼阿も亦賑しからねば答ふるに歌を以てし聊か錢を償ふ其貧交想像るべし兼好清閑寺の道我と友たり又毎に高師直の家に通ふ皆和歌をもて交るなり一日師直兼好に託して艶簡を作らしむ兼好便ち之を書けり其抱はらざることを此の如し偶二月の望の夜月に乘じて千本の釋迦堂に詣で潜かに堂後に入りて獨遺教經を聴く忽ち美婦人あり來りて兼好の側に傍ふ膏粉移るが如く蘭麝人を襲ふ兼好席を避けしに婦人慕ひ來りしかば兼好即ち席を起ちて去れり蓋し宮女の兼好を知れる者其節操を見んと欲して相謀りて爲しなり嘗て心友の得難きを論じて獨燈下に坐して書を讀みて古人を友とす樂しみ此れに過ぎたるは莫しと曰へり好みて文選白氏文集老莊の書を讀み

又本朝の古文を愛す著す所の徒然草往々己が志しを示せり初め兼好童兒ありよく和歌を詠み且萬葉古今の事を知れり兼好出家の後今川了俊これを招き左右に侍せしめしと云ふ

大阪より住吉へ參詣順路

南海鐵道難波停車場より天下茶屋を経て住吉停車場に至る此所にて關西鐵道と連絡す又堺市及和歌山に通ず梅田停車場よりは官線天満櫻宮京橋玉造桃山天王寺天下茶屋を経て住吉に至る又天王寺住吉間に馬車鐵道あり高野鐵道沙見橋停車場よりは木津川阿部野を経て住吉および吾孫子河内國長野に至る住吉街道は難波より今宮爲田天下茶屋を経て住吉に至る其の路筋に參るべき所を左に示す  
廣田社 今宮にあり

祭神 天照太神荒魂 住吉大神 八幡神

大山咋命 高皇産靈尊

攝州武庫郡廣田神社と同神なり

蛭子社 同所にあり

祭神 天照大神 蛭子尊 大己貴尊

素盞鳥尊 月讀尊

大阪の俗此御社を商神と稱へ毎年一月十日には福徳を祈らんとて群参すこれを十日戎といふ國々近在よりも老若男女集ひて雖奮いはん方なし南地の花街よりは寶榮廻と稱へ藝妓數多綺羅を飾り竹輿に乗りて詣づるを例とす社頭には小さき米俵金銀錢取鉢秤米花袋などめでたき物を造り吉兆の小賣くと呼び賣るを参詣の人我一と買ひ求め竹枝につけて家に歸りて神棚にあぐる風俗となれり

是より南天下茶屋は前に記せり

阿倍野街道は天王寺より阿倍野を過ぎて住吉にいたる途中参るべき所は庚申堂のみ

庚申堂 天王寺の南門の南にあり

本尊 青面金剛童子 梵天帝釋 三申四鬼 薬師地藏觀音 等を安置す

文武天皇大寶元年正月庚申の日天王寺の住僧正善院民部僧都毫絶の建つる靈場にて日本最初の庚申堂とす今に至るまで千有餘年庚申の祭り絶えたる事なし隔月庚申の日には諸人群参す境内に昆布を賣る店を出すこれを庚申昆布といふ

歴史及物語

住吉行幸 當社は代々の帝御尊崇ありて寶物和歌等を奉納し給ふ事

多し鳳駕を寄せ給ひしは 持統 元正 聖武 桓武 平城 仁明

文徳 後白河 後鳥羽 後深草 龜山 後醍醐 後村上

今上陛下 なり

文徳天皇天安元年住吉に行幸ありし時宮居古りて朽ち損じたるを  
御覽し給ひていと長き事なりと思し食しける折から神殿の内より

夜や寒き衣やうすきかたそぎの

ゆきあひの間より霜やおくらん

と聞こゆるやうなりければ天皇神の告げなりとて即て宮作り嚴か  
にし給ひけるとなん

伊勢物語には何れの帝にや住吉に行幸し給ひけるに御神形を現は  
し給ひて

むつまじと君は知らずや瑞籬の

久しき世よりいはひそめてき

といふ歌をよみ給ひしと見えたり

赤染衛門

大江匡衡の妻赤染衛門其子舉周が重き病に臥して死ぬべ

く見えければ住吉に詣て七日籠りて此たび舉周の命助かり難くは  
速かに我が命にめしかへ給へかして願ひ申して七日に満ちける日  
御幣の垂手にかきつけゝる歌

かはらんと祈る命はをしからで

さても別れんことを悲しき

かく詠みて奉りけるに神威ありけん舉周の病よくなりけり舉周  
母が願をかけし事を聞きて痛くうち歎き我生きたりとも母を亡ひ  
ては何のいさみかあらんと住吉に詣て、申しけるは母我にかはり  
て命終るべきならば速かにもとの如く我が命をめして母を助けさ  
せ給へと祈りけり神また其孝をわはれみ給ひけん母子ともに事の

忍なかりけり

忍熊皇子 隣坂皇子 忍熊皇子は共に仲哀帝の御子

御母は妃大中姫にて應神天皇の庶兄なり仲哀帝神功皇后ともにも熊襲を征し給ひ桓日の行宮にて崩御ありしかば皇后武内宿禰をして梓宮を穴門の豊浦宮に殯せしめ直に三韓を征伐し還りまして應神天皇を筑紫に産み給ひ穴門に至りて梓宮を奉じ海路より京に歸らんとし給へり隣坂忍熊これ聞き密かに謀るやう皇后御子を生み給ひ群臣皆これに従へり必ず幼主を立つべし我何ぞ兄をもて弟に従はんやと曰ひて父帝の山陵を作るに託け播磨に往きて船を作らしめ又石を取りて陵を起すと宣言し人毎に兵器を持たしめて皇后を要しけり倉見別及び五十狹茅宿禰など二皇子に驚しければ將軍となし東國の兵を發せしめ二皇子菟峨野に狩して祝ひて曰く事もし成るべくは必ず大に獲物あらんと既にして共に假床に座せ

しに忽ち赤猪あり暴れ至りて隣坂皇子を噬み殺してけり此ありさまを見て軍士皆恐れ慄きければ忍熊倉見別に謂ふやう是大なる怪しき事なり此地に敵を待つべからずといひて軍を引きて住吉に屯しけり皇后變を聞こしめし舟師を率ゐて難波に至り直に住吉に向はんとし給ひしかば忍熊大に恐れて菟道に退きけり皇后武内宿禰と武振熊とを遣はして撃たしめ給ひしかば忍熊戦ひ破れて五十狹茅と共に近江の瀬田濟に投じて身を亡びき

大神愛歌 井蛙抄に

ある聖西國より上りて住吉の社に参りて通夜しけるが不圖まどろみし夢に御社の前に僧俗男女數多参り集りけり中にはいと賤しきもあり殊にいみじく貴げなる人もまじりて歌よむ所に暫くありて黒衣の僧一人参りたるを神殿の内に召し入れられ氣高き御聲して心なき身にもあはれば知られけり

鴨たつさはの秋のもふぐれ  
といふ歌を詠じ給ふと見て夢さめにけりいと不思議なる事なりし  
と人々に聖が語りけるよしを記せり心なきの歌は西行法師の作な

西林寺梅 後醍醐天皇に仕へ奉りし大納言の典侍といふ人天皇崩御  
の後尼になりて住吉の西林寺といふ寺に住けり後村上天皇彼の寺  
の梅の花をめさるとて

わが頼む西の林のうめのはな

御法の花のたかねとを見る

住吉物語 清少納言の枕草紙に物語は住吉うつほの類といへれば古  
くよりありし物なるべけれと今の世に傳はるは昔の名をかりて後  
人の作れるなるべしされと小一條院の御歌入りたりといへば無下  
に近き世のものにもあらじ其物語の大畧は

昔中納言にて左衛門督兼ねたる人の女継母に悪まれて冤の禍ひを  
身に受けせんかた無さに侍女の侍従といへると共に家を脱け出で  
、實母の乳母の尼になりて住吉に住める許に隠れ居しが時の右大  
臣の公達中將なる人に契りて京に歸り久しぶりにて父の中納言に  
逢ふことを得しより継母の悪謀あらはれ遂に継母ははかなくなり  
中將夫婦は富み榮え侍従も出世したりし事を面白く綴りなせり  
元來作り物語にて事實ありしことならねと文中住吉に縁ある所を  
一二段左に抄出す

宮腹の姫君および侍従を住吉の尼の伴ひて淀より舟にて下る段  
さるほとなれば尼君なとつれて河尻を過ぐればをかしうも行きち  
がふ船に乗りたるものせものあやしき聲々してつまも定めぬ岸の  
姫松とうたひて漕ぎ行くもならばぬこゝちしてあはれなり京の方  
は霧ふたがりてそこはかとも見えす比叡の山ばかりほのかに見え

たるけしきもの思はざらん空だにあはれなるべしいはんやありが  
たき親にひき別れ情ありしはらからをふりすて、いづちを行く  
らんと思ひつゞけ、ん心のうちいかばかりなりけんこれを見て尼君  
住よしのあまとなりては過ぎしかど

かばかり袖をぬらしやはせし

なぞいひつゝ、住吉に行きたれば住よしとて所々住みあらしたるに  
海さし入りたるに造りかけたれば簀子の下に魚なぞ遊ぶも見えて  
南は一むらの里はのかに見えて笠屋にも海松和布刈り干し蘆の  
屋に心ばそく烟たちのぼるけしき薄墨にかける蘆手に似たり東に  
は離につたふ朝顔なぞかゝりて岸にはいろゝの花紅葉うるなら  
べたり西には海はるゝ見え渡りて並み立てる松の木の間より帆  
かけたる船ども淡路島を行きかふさまも波にたゞよふ簀火はかな  
く見えで日の入るは海の中に入るかとあやしまれけるわざとなり

では人なぞ来べくも無し静かにあはれなる住家にてぞ侍りけるち  
いさやかに造りて阿彌陀の三尊うつしならべて月日の出づるばか  
りは尼君西に向ひて南無西方極樂教主阿彌陀如来後生助け給へど  
申したるを見るにつけてもあらぬ世に生れたるこゝちして姫君も  
侍従も疾く尼になりて同じさまにどのたまへば尼君御髪はとて  
かくても侍りなん御心にぞよるべき今は此老媪が申さんまゝにお  
はしまさずばうち棄奉りてかくれ侍るべしといへばこれも背き  
がたくて明暮は佛の御前にて經を讀み花をたてまつりなぞぞし給  
ひける

中將姫君を尋ねて住吉に来る段

中將はならはぬさまなれば薬香にあたりて足より血あへり行きや  
らぬけしきなれば道行人あやしきものども目をうつけてぞ見あひけ  
るさても泣くゝ酉の時はかりにはるゝと並み立てる松の一む

らに蘆屋ところへあり海見えたる所に行き給ひぬれどもいづく  
とも知らず思ひわづらひて松の下に休み給ひけるに十あまりなる  
童松の落葉ひろひけるを呼び給ひておのれはいづくに住むぞ此の  
わたりをばいづくといふぞと問へば住吉となん申すやがてこれに  
侍るなりといへばいと嬉しき事と聞きてこのわたりにさるべ  
き人や住むと仰せられければ神主の大夫殿こそといへばさても京  
なごの人の住む所やあると仰せらるれば住吉殿と申す所こそ京の  
尼上とおはするといひければ細かに尋ね問ひて行き給ひたれば  
江に造りかけたる家のものさびしき夕月夜木の間よりほのかにさ  
し入りてをさくしき人も見えすいともあはれなる日も暮れけ  
れば松のもとにて人ならば問ふべきものをなごうちながめてイみ  
わづらひ給ひけるさらぬだにも旅の空は悲しきに夕波千鳥あはれ  
に鳴きわたり岸の松風物さびしき空にたぐひて琴の音ほのかに聞

こえけりこの聲律にしらべて盤渉調に澄みわたれりこれを聞き給  
ひげん心はへばおろかなりあなゆゝし人のしわざにはよもなご思  
ひながらその音に誘はれて何となく立ちよりて聞き給へば釣殿の  
西面に若き一人二人がほそ聞こえてけり琴かきならず人あり冬は  
をさくしくも侍りき此頃は松風浪の音もなつかしく京にてかゝ  
る所も見ざりしものをあはれく心ありし人々に見せまほしきよ  
どうち語らひて秋の夕は常よりも旅の空こそあはれなれなごうち  
ながらむるを侍従にさゝなしてあなあさましと胸うちさわぎて聞  
きなしにやさて心を留めて聞き給へば  
尋ねべき人もなきさの住吉に  
たれまつ風の絶えず吹くらん  
どうち詠むるを聞けば姫君なり  
中將の由縁の人々住吉に尋ね來りける段

さて、ゆかりある人々左衛門佐藏人少将兵衛佐殿よりはじめて四位五位などその外住吉に尋ね行き給ひていみじく覺束ながらせ給ふにいかになど云ば示現によりてこれに侍りつる程におもはずに此邊にあるもの見つけてなごのたまへば神佛へ参りては行ひをこそすれゆゝしき御勤めかなとて戯れてうち笑ひ給ひと嬉しくこれまで尋ね給へり難波あたりもかゝる序なくばいかでか御覽すべきとのたまひつゝ、夜更くるほごに住吉に月さやかに澄みわたりて松風浪の音にたぐひつゝ、淡路島まで通ひて聞ゆるさまこの世ならず面白かりければ人々住吉にて遊び戯れたまへり三位中将琴藏人少将笛兵衛佐の笛左衛門佐歌うたひ給ひけり姫君侍從尼君などこれを聞きてはるゝ心地ぞしたまひけるさて夜明ければ海人もめしてかづさせさせて見給へりさてその日京へ上らせ給ふとていとくことくしかりけり姫君をば田舎人のむすめとて相具し奉り

給ふ姫君をば尼君心安く見奉りながらその程のなごり申すばかり無し尼君には和泉なる所預けられければ行末の事は思はずたいあの姫君の御事のみぞ思ひ侍りつる程に今は黄泉路やすくとして送りて嬉しきものから離れ行くもさすがにあはれなりとにもかくにも落つる涙かな佛になりなん後ぞやといまるべきとてくどきける姫君も何となく二年まで住みし所離れ行くこそあはれなれ尼君もいかにならひて戀ひしく傍さびしく思はんなど侍從に聞こえあはせて見かへり給ひければやうく遠くなり行くほどに一むらの絶間より松の木末はるかに見えければ住よしの松の梢のいかならん

とほさかるまで袖のつゆけき

と思ひついでけられけるかくしつゝ、河尻をつぐれば遊女どの數多船につきて心から浮きたる舟に乗りそめて一日も波にぬれぬ日ぞな



きなと歌ひて淀までぞつきにける

住吉物語の文章凡かくの如しこれを讀めば昔のありさまを思ひや  
らる紫式部が書ける源氏物語にも住吉に行幸の事あれを餘りにく  
だくしからんとて畧せり

阿倍野 平治の亂に平清盛紀州より京都へ歸り上ると聞えしかば源  
義朝の嫡男悪源太義平これを阿倍野に要して戰たんと請ひけれ  
藤原信賴之れをゆるさざりければ清盛直に歸京して一戰に信賴義  
朝皆亡ぼされたり平治物語に云く

さる程に十日の曉六波羅の早馬紀州熊野切目の宿に追ひ付きたり  
清盛いかにと問ひ給へば去ぬる九日の夜三條殿へ夜討入りて御所  
みな焼き拂ひ候ひぬ少納言入道の宿所も焼き拂はれ候ふこれは右  
衛門督殿左馬頭義朝を相語らひて當家を滅ぼし奉らんと謀とこ  
そ承り候へと申せば清盛急ぎ下向すべしとて熊野別當滿増に使を

立て給へば兵二十騎奉る湯淺權頭宗重三十騎にて馳せ參ればかれ  
これ百餘騎になりけりこゝに悪源太義平二千餘騎にて阿倍野に  
待つと聞えければ清盛此無勢にて大勢に遇ひて討たれん事無念  
なれまづ是より四國に渡り勢を催はして後日に都へ入らばやと宣  
へば重盛申されけるはそれもさにて候へとも事延引になり候は  
定めて當家退治のよし諸國へ院宣給旨をなし給ふべし却つて朝敵  
となりなん後は後悔すとも益あらじ多勢を以て無勢を討つ事は常  
の業なり無勢を以て多勢を亡すは六韜の奥儀なるべし然らば無勢  
なりとも馳せ向ひて戦ひ敗北せば即時に討死したらんこそ後代名  
も勝るべけれ何とか思ふ家貞と宣へば筑後守六波羅の御一門もさ  
こそ覺束なくおぼすらん急がせ給へと申せば清盛も然るべしとて  
都をさして引き返すかゝる所に武者一騎來れり源氏の使かと思れ  
ば平氏の家人なり清盛めしてさても悪源太が阿倍野に待つといふ

はいかにと問ひ給へば其義はかつて候はず伊勢國伊東の兵をもこ  
そ都へ入らせ候は、御供仕らんと三百餘騎にて待ち參らせ候ひつ  
れと申せばさては悪源太にてはあらずしてよき味方ござんなれう  
てや者共とて皆色を直して我先にと進みき  
北島顯家卿 此卿を祭れる社及び墓の事は前に記せり今戦死のさま  
を述べん太平記に曰く  
北島顯家卿南都般若坂の戦ひにうち敗けて和泉の堺にありと聞え  
しかば執事高師直所々の軍兵を招き集め和泉の堺河内はもと敵國  
なればさらでだに恐懼する所に強敵その中に起りなば和田桶も力  
を合すべしいまだ微なるに乗じて早速に退治すべしとて八幡には  
大勢を差し向けて敵の討ちて出でぬやうに四方を固め師直は天王  
寺へば向ひける顯家卿の官軍共疲れてしかも小勢なれば身命を棄  
て、支へ戦ふといへども軍利なくして諸卒散々になりしかば顯家

卿立つ足もなくなり給ひて芳野へ參らんと志し僅に二十餘騎にて  
大敵の圍みを出でんと自ら利を破り堅きを碎き給ふといへども其  
戦功徒らにして五月二十二日和泉の堺阿倍野にて討死し給ひけれ  
ば相従ふ兵悉く腹切り疵を被ふりて一人も残らず失せにけり顯家  
卿をば武藏國の越生四郎左衛門尉討ち奉りしかば首をば丹後國の  
住人武藤右京進政清これを取りて甲太刀まで進覽したりければ師  
直之を實檢して疑ふ所なかりしかば抽賞御威の御教書を兩人にぞ  
與へける哀れなる哉顯家卿は武畧智謀其家にあらずといへども無  
雙の勇將にして鎮守府將軍に任じ奥州の大軍を兩度まで起して尊  
氏を九州の遠境に追ひ下し君の宸襟を快く休め奉られし其譽れ天  
下の官軍に先立ちて争ふ輩なかりしに聖運天にかなはず武徳時至  
りぬるその謂れにや股肱の重臣あへなく戰場の草の露と消え給ひ  
しかば南朝の侍臣官軍も聞きて力をぞ失なひける

吉野拾遺に曰く

先帝の御時源中納言陸奥の軍をあまた従へ給ひ道々を平らげて美濃の國までおはしけるよし先だちて聞えければ上よりはじめて頼もしき事におぼし給ひけるに阿倍野の露と消えさせ給ひけること刑部亟友成が其際のありさまを参りて泣く泣く語るに燈火のさえぬるやうになん人々の心はなりにける御父の卿はいかばかりおぼすにか

さき立てし心もよしや中々に

うき世のことを思ひ忘れて

北の御方はたい伏し沈ませ給うて更に御心地もなかりけるを騒ぎておもてに水なをそそぎし程に又の日の夕暮のはどにすこし御心地の出でさせ給ひて

主の緒の絶えもはてなで繰返し

同じうき世に結ばはるらん

なほ同じ道にと思したち給へる御氣色のいちじるし侍りければ立ち去り給はし人々の護りければ御心にも任せ給はし觀心寺といへる山寺にて御髪おろして住ませ給へるに

そむきても猶忘られぬ面かけは

うき世の外のものにやあるらん

こゝに三年が程すくし給うて世の騒ぎもしばし静まりければさすが故郷の方や思ひいでさせ給ひけん吉野山をたどり出でさせ給ふとて

いづくにか心とめん三吉野の

よしの山をいで行く身は

親房卿の御許にしばしおはしまして曉かたに立ち出でさせ給ひけるに御名残のつささせ給ふまじき御事にてありければかへりみさ

せ給へるに有明の月のいとさやかに山の端近く見えければ  
別るれどあひも思はぬ三芳野の

みねにさやけきありあけの月

阿倍野を過ぎさせ給ひけるにこゝなん其人の消えさせ給へる所と  
告げければ草のうへに倒れ伏させたまうて

なき人の形見の野への草まくら

夢もむかしの袖のしら露

このほとりに刑部亟友成が世をそむきてありけるを尋ねさせ給ひ  
けるに急ぎ参りて御ありさまを見奉るにさしもゆかしく渡らせ給  
ひける御よそはひのいつしか變りおとるへさせ給ひけるはやと涙  
といめあへで住吉天王寺のほとりまで御送りに参りて所々の案内  
しけるに天王寺の龜井の水のほとりの松の木をけづらして  
後の世の契りのために残しけり

むすぶ龜井の水ぐきのあと

と書きつけ給へりそれより友成入道は歸りにけりと一とせ尋ね來  
りて語りけるにいとあはれに思ひ奉りて其後天王寺に参りけるに  
御筆の跡の消えもはてずして残りけるを見まゐらせてそゝるに袖  
をしぼりけるにこそ其後都にのぼらせ給ひて母君も共に世をそむ  
きおはしけるが先立ち給ひて又の年の春うせさせ給ひけりとぞ聞  
えし日野中納言資朝卿の御女なり

住吉合戦 後村上天皇正平三年北朝の貞和四年十一月楠正行と山名

時氏細川顯氏と合戦せし趣きは太平記に悉しく述べたり其段に曰

去ぬる九月十七日に河内國藤井寺の合戦に細川陸奥守顯氏かひな  
くうち負け引き退きし後楠帶刀左衛門正行勢ひ機に乗りて邊境常  
に侵し奪はるといへども年内は寒氣甚しくして兵皆指を落とし手

龜まることありぬべければ暫しとてさし置かれけるがさのみ延引せば敵に付きぬべしとて十一月二十三日に軍評定ありて同二十五日山名伊豆守時氏細川陸奥守顯氏を兩大將にて六千餘騎を住吉天王寺へ差し下さる顯氏は去ぬる九月の合戦に楠帶刀左衛門正行にうち負けて天下の人口に落ちたる事生涯の耻辱なりと思はれければ四國の兵どもを召し集めて今度の合戦また先の如くして歸りなば萬人の嘲哂たるべし相構へて面々身命を懸んじて以前の耻を雪がるべしと衆を勇め氣を勵されければ坂東坂西藤橋伴の者ども五百騎づゝ一揆を結びて大旗小旗下濃の旗三流立てゝ三手に分け一足も引かず討死すべしと神水を飲みてどうち立ちける事の趣き實に思ひ切りたる体かなど先すゝしくぞ見えたりける追手の大將山名伊豆守時氏千餘騎にて住吉に陣を取れば搦手の大將細川陸奥守顯氏八百餘騎にて天王寺に陣を取る楠帶刀正行これを聞きて敵に

足をためさせて住吉天王寺兩所に城廓を構へられなば神に向ひ佛に向ひ弓を挽き矢を放つ恐れありぬべし不日に押し寄せてまづ住吉の敵を追ひ拂ひ只攻めに攻めたてゝ急に追つかくる程ならば天王寺の敵は戦はで引き退きぬと覺ゆるぞとて同二十六日の曉天に五百餘騎を率しまづ住吉の敵を追ひ出ださんと石津の在家に火をかけて爪生野の北より押し寄せたり山名伊豆守これを見て敵一方よりよも寄せし手を分けて相戦んとて赤松筑前守貞範に攝津播磨兩國の勢を差し副へて八百餘騎濱の手を防がんと住吉の浦の南に陣を取る土岐周濟房明智兵庫助佐々木四郎左衛門其勢三千餘騎にて阿倍野の東西兩所に陣を張る搦手の大將細川陸奥守は手勢の外四國の兵五千餘騎を率してわざと本陣を離れず荒手に入れ替へんために天王寺に控へたり追手の大將山名伊豆守舍弟三河守原四郎太郎同四郎次郎同四郎三郎は千餘騎にて只今馬烟を擧げて進みた

るに先蒐の敵に懸け合ひせんと瓜生野の東に懸け出でたり楠帯刀は敵の馬烟を見て陣の在所四箇所にありと見てければ多からぬ我が勢を數多に分ければ中々悪かるべしとて本五手に分ちたりける二千餘騎の勢をたゞ一手に集めて瓜生野へ打ちてかゝる此陣東西南北野遠くして四馬蹄を勞せざれば兩陣互に射手を進めて鬨の聲を一擧ぐる程こそあれ敵味方六千餘騎一度に颯と懸け合ひて思ひに相戦ふ半時ばかり切り合ひて互に勝鬨をあげ四五町が程兩方へ引き分れ敵味方を見渡せば兩陣過半滅びて死人戰場に充滿たり又大將山名伊豆守切疵射疵七所まで負はれたれば兵前に立ち隠して疵を吸ひ血を拭ふは少し猶豫したる所へ楠が勢の中より年の程二十ばかりなる若武者和田新發智源秀と名のりて洗皮の鎧に大太刀小太刀二振帯きて六尺餘の長刀を小脇に狭みしづくと馬を歩ませて小歌を歌ひて進みたり其次に一人是も法師武者の長七

尺餘もあらんと覺えたるが阿間了願と名のりて唐綾威の鎧に小太刀帯きて柄の一丈ばかりに見えたる鎧を馬の平頭に引き副へて少しも擬議せず懸け出でたり其勢ひ事から尋常の者にはあらずと見えながら跡に續く勢なければあれやとばかりいひて山名が大勢さしも驚かて控へたる中へ只二騎つと懸け入りて前後左右を突きて廻るに小手のはづれ體當のあまり手反の直中内甲一分もあきた所をばづさず矢庭に三十六騎突き落して大將に近づかんと目を賦る三河守これを見て一騎合ひの勝負はかなはじとや思はれけん大勢を以てこれを取り籠めよと百四五十騎にて横合にかけられたり楠又これを見て和田討たすな續けやとて相懸りにかゝりて責め戦ふ太刀の鏗音天に響き汗馬の足音地を動かす互に味方を耻かじめて引くな進めといふ聲に退く兵なかりけりされども大將山名伊豆守已に疵を被ふり又入り替はる味方の勢はなしかなふべしと覺え

ざりければ歩立なる兵ども伊豆守の馬の口を引き向けて後陣の味方と一所にならんと天王寺をさして引き退く楠いよ／＼氣に乗りて追つ懸け／＼攻めける間山名三河守原四郎太郎同四郎次郎兄弟二騎犬飼六郎主従三騎返し合せて討れにけり二陣に控へたる土岐周濟房佐々木六郎左衛門三百餘騎にて阿倍野の南に懸け出で、暫し支へて戦ひけるが目賀田馬淵の者ども三十八騎一所に討れにける間此陣をも破られて共に天王寺へと引きさる一陣二陣かくの如くなりしかば浪の手も天王寺の勢も大河後にあり兩陣前に破れぬ敵に橋を引かれなば一人も生きて歸る者あるべからず先橋を警固せよとて渡邊を差して引きけるが大勢の靡き立ちたる習ひにて一度も更に返し得ず行くさま狭き橋の上を落つともいはずせき合ひたり山名伊豆守は我身深手を負ふのみならず馬の三頭を二太刀切られて馬は弱りぬ敵は手繁く追つ懸くる今は落ち延びじこや思

はれけん橋づめにて巳に腹を切らんとせられけるを河村山城守只一騎返し合せて近づく敵二騎切りて落し三騎に手を負せて暫し支へたりける間に安田彈正走り寄りて如何なる事にて候ふぞ大將の腹切る所にては候はぬものをといひて己が六尺三寸の太刀を守木になし鎧武者を鎧の上に掻き負ひて橋の上を渡るに守木の太刀にせき落されて水に溺るゝ者數を知らず播磨國の住人小松原刑部左衛門は主の三河守討れたることをも知らず天神の松原まで落ち延びたりけるが三河守の乗り給ひたりける馬の平頭二太刀切られて放れたりけるを見てさては三河守殿は討たれ給ひけり落ちては誰がために命を惜しむべきとて只一騎天神の松原より引き返し向ふ敵に矢二筋射懸けて腹かき切りて死しにけり其外の兵ども親討れたれども子は知らず主討死すれども郎黨これを助けず物具を脱ぎ捨て弓を杖に突きて夜中に京へ逃げ上る見苦しかりし有様なり阿

倍野の合戦は霜月二十六日のことなれば渡邊の橋よりせき落され  
て流るゝ兵五百餘人かひなき命を楠に助けられて河より引き上げ  
られたれども秋の霜肉を破り曉の氷膚に結びて生くべしとも見え  
ざりけるを楠情ある者なりければ小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め  
薬を與へて疵を癒せしむかくの如く四五日皆勞はりて馬に乗る者  
には馬を引き物具失へる人には物具を着せて色代してを送りける  
されば敵ながら其情を感ずる人は今日より後心を通せんことを思  
ひ其恩を報せんとする人はやがて彼手に屬して後四條繩手の合戦  
に討死をぞしける

平等院僧正 古今著聞集に曰く

平等院僧正諸國修行の時攝津國住吉のわたりに至り給ひて齋料の  
盡きにければ神主國基が家におはして經を讀みて立ち給ひたりけ  
り其聲微妙にして聞く人たふとみあへりけり國基御齋料奉ること

何方へ過ぎさせ給ふ修行者を御經たふとく侍り今夜ばかりは此所  
にどいまり給へかし御經の聽聞仕つらんといはせたりければどか  
くの返事をばのたまはず歌を詠みたまひける

世を捨て、宿も定めぬ身にしあれば  
住よしとてどもとまるべきかは

かくいひて通り給ひぬ其後天王寺別當になりて彼寺におはしまし  
ける時國基参りて天王寺と住吉との境の間の事申し入れけるに暫  
し候へとてあやしく御前へ召されければかしてまりつゝ参りたり  
けるに僧正明障子引きあけさせ給ひてあの住吉とてどもとまるべき  
かは、いかにと仰せられたりける國基あきれまどひて申すべき事  
も申さで取り袴して逃げにけりいと興あることなり

後徳大寺左大臣 名歌の徳

嘉應二年十月九日道因法師人々をすゝめて住吉社にて歌合しける



百十  
に後徳大寺左大臣前大納言にておはしけるがこの歌をよみ給ふとて社頭月といふことを

ふりにける松ものいは、問ひてまし

むかしもかくや住の江の月

かくなん詠み給ひけるを判者俊成卿殊に感じけり世の人々も譽めのしりける程に其頃かの家の領筑紫瀬高の庄の年貢積みたりける船堀津の國に入らんとしける時悪風にあひて既に入海せんとしける時いづくよりか來りけん翁一人出で來りて漕ぎ直して別事なかりけり舟人あやしみ思ふ程に翁のいひけるは松ものいは、の御句おもしろう候ひてこの邊に住み侍る翁の參りつると申せといひて失せにけり吉住大明神のかの歌を感せさせ給ひて御体をあらはし給ひけるにや不思議にあらたなることかな

經信大納言 二名歌の評

後三條院住吉社に臨幸ありける時に經信卿序代を奉られけり其歌に曰く

沖津風吹きにけらしな住吉の

まつのしづ枝をあらふ白波

當座の秀歌なりけるかの卿のちに俊頼朝臣をよびていはれけるは古今集に入れる躬恒の歌に

住よしの松を秋風吹くからに

聲うちそふるおきつ白なみ

この歌を任大臣の大禊せん日和歌所詠の沖津風のうた中門の内に入ると史生の禊につきなんやと俊頼公のこの仰せいかん彼の御歌全くおとるべからず然れども古今の歌たるによりてかぎりありて先任の大臣候はんに御作は一の大納言にて尊者として南階よりねり上りて對座に居なんところ存じ候へといふ帥の曰くさらばさも

ありなんやいかゝあるべきとて感氣ありけり  
住吉に由縁ある物語なほ此外にも數多あれを略す

住吉及び近傍の詩歌

前に住吉の名所の歌は載せられぬは漏れたるが多ければ詩とあは  
せて左に載す

住吉八景

恒亭 桂艸因作

社頭賞春

宮垣春色正巍々

數本花開錦繡園

化及三韓昔年業

神風百世倍芳菲

住江松風

百尺群松萬頃波

天風吹動綠娑婆

笙簧長奏神明地

正是江聲梢外和

淡州落月

月落星稀曉霧晴

浦舟横去櫓無聲

蒼茫極目前州島

十里金波一樣清

高橋曉雪

冷光粧出玉欄干

橋上無人月一圓

興忍曉寒弄詩思

飄然瀾水雪中看

四天晚鐘

殘紅碧樹接江阜

斷續鯨音隔境號

忽報四天王寺暮

回頭山上月方高

境浦歸帆

松影波紋落日斜

風帆遠近帶烟霞

漁郎江上指何處

境浦年來沽酒家

安倍晴嵐

虹霓截雨殘陽發

安倍野雲歸暗峰

嵐氣不侵微醉裡

楊堤麥隴靜牽筠

遠里夜雨

寒雨蕭々夜寂々

四山雲合暗平蕪

幽豁小野難歸去

燈火迢然乍有無

右八景

墨江

柴秋村

高燈樓下宿雲絨

習々涼風觸葛衫

日出未暝松葉露

已分新翠與行帆

住吉路上

僧觀水

燈臺百尺聳春天

萬里奔潮到眼前

關外風收斜照靜

亂橋抽出碧松巔

天下茶屋

藤澤南岳

一自龍車賜寵光

勝名不獨屬猿郎

滿園花木春風富

長爲遊人逗御香

阿倍野

廣瀬旭莊

興亡千古泣英雄

虎鬪龍爭夢已空

欲問南朝忠義墓

菴花秋仆野田風

同懷古

小野湖山

撥軍功已立

意氣甲諸卿

可惜半途敗

空留千載名

丘墳鋤欲盡

廟祀典初成

不遇維新日

安能表至誠

今宮神祭

廣瀬旭莊

求福何須懇禱深

翁然唯合絕貪心

生平不解世人算

擲我真金買假金

十日蛭子

篠崎小竹

入春十日惠風吹

一路紅塵蛭子祠

醉歸潦倒君休笑 擔得竹枝歌竹枝

住吉所看

早野思齋

不知數日艷陽催

黃草寒風野水隈

近看墨岸青松色

且伴村翁牽艇來

退潮

後藤春草

三月三日淑光新

墨江祠下退潮辰

尻高而啄譏何物

群々俯拾蛤蜊人

住江所感

田中金峯

四廟森々松樹中

老巫肅舞是遺風

海濱近日胡氣惡

私羨三韓征伐功

墨江

日柳三舟

高橋如大月 影自樹梢生 登々輕步履 人上碧宵行

住よしもなにはもおのが浦々ど

下河邊長流

なぎたる見れば霞なりけり

住吉の松ぞかすみにあらはるゝ

借契沖

遠里小野の草のはつかに

住ののの浦わに立ちて月見れば

加茂真淵

なにはのかたに鶴ぞなくなる

住吉のたからの市にうる樹の

荒木田久老

思ひはからぬ今日にもある哉

雁よなき心もとめすすみよしの

加藤千蔭

春のはまべをたちわたるらん

住の江の長居の崎のまつかせは

熊谷直好

遠き神代のことつたふなり

住の江の浦の松風こゑたえて

村田春海

かすみにもるおきつ白なみ  
君が代を千代と祈れば住吉の

伊達千廣

神もうけたるまつかせぞ吹く  
住の江の松風かすむ朝な

中村良顯

沖になりゆく波の音かな  
住の江に花のさかりも長岡の

津守國美

桃こそ春のながめなりけれ  
明治元年四月住吉に

津守國美

行幸ありし時に  
住吉の神もうれしと思すらん

僧 涌 蓮

まつかひありし君がみゆきを  
神代より久しくふりぬ住吉の

蒼 生 子

蜜のかる物ならなくに此浦の  
みるめとなれる住の江のまつ

富士谷成幸

千代を契りてたれかうるけん  
住よしの岸根の松はちりうせぬ

涌 蓮

ことばの種と神や植えけん  
住の江の松や神代の種ならん

春 海

老いぬてふ名も千年経にけり  
松の葉のつもる年や住の江の

契 冲

岸にかへりて浪とよすらん  
住吉と汀の鶴も鳴くなるを

小 澤 蘆 菫

うらみても歌をいひつゝなぐさめば  
うらみてのみや世を過すべき

長 流

世に住よしの神ぞうれしき

津の國のいづくはあれを岸陰に

浪のいざよふ住よしのうら

万代にまつ千年の色をへて

君をぞまもるすみ吉の神

みづかさの久しき代より住吉の

よしとよく見て神やしめけん

たぐひなき光にもあるか住の江の

磯たちならず浪の上の月

すみの江や故郷いそぐ春の雁

さしによるてふ貝もひろはで

住よしの松風さむみ寝覺むれば

こゝろ細江に千鳥鳴くなり

哲子

荷田春満

契冲

春海

本居宣長

契冲

老らくのならひも添ひて霞むらん

としをつもりの浦の月かけ

住の江や細江の浪のかすむ夜は

あるかなさかに月ぞやせれる

住吉歌合

九月廿八日参社頭合之前々の歌合のうちに住吉のうらやませ給

ふよしの夢たびくありしかばまゐりてあはせられたるなり

題 同前 判者 神祇伯顯仲卿

一番 月述懐

左

くまもなき月に心をなぐさめて

うき身にとしのつもりぬるかな

右

千蔭

春海

前和泉守道經

伯女

月さよみ心もすめる秋の夜や

身をうき雲のはれ間なるらん

判云 左和歌うるはしくよまれてはべり

されどくまもなき月に心をといへるこそふるめかくしや

右歌いまめかしくはべれどすこしもこの心もかず思うたまへらるれば

あまの舟さしてもいはし月ひとの

かつらの船をとるにまかせて

二番

紅葉 寄書

前淡路守仲房

みつしはのひる間に過ぐる東路や

さよ見がせきにもみぢしにけり

右

帥大夫重道

ちりぬべき紅葉のにしき夕かせの

たぬぬさきにとさても見るかな

判云 左歌の心覺つかないかですぐらん旅人のもみぢは關

のかたみと思ふに とこそ見え侍れいかい

右 おりかくる森のもみぢの錦をも風のたつにぞうは着と

もなる心地し侍るかき散らさじと思ふころよく侍りされ

とたぬぬさきに紅葉の錦を着たればにや姿の心もかず見え

侍れば梢の風たちまさらんことかたかくやと覺えはべれば

清見がたやしほにそむる紅葉に

もみぢのにしきたちもまさらじ

と申すべきにや

三番

鹿 寄書

左

親 房

白つゆのおきゐてきけば佐保山に

あかつきかけて小鹿なくなり

重道

柴の戸をあらしの過ぐるあけ方に

つまよぶ鹿はこゑたてつなり

左右ともものに寄せられたるさまくだけで待れど今少し

左やすみみて

さごろもの袂すいしき風よりも

をじかのこゑを身にはしみける

四番 虫 夕

豊雅己講

とふ人もなき故郷のくれごに

たれまつむしの絶えず鳴くらん

兵衛君

まくずはらなびく夕への秋かせに

うらみがほなるまつ虫のこゑ

身をつめばみなまつむしと知りながら

うらみがほなる聲やまさらん

となん見え侍るすこしすこきどころのはべるかどよ

五番 萩 戀

大夫典侍

いとほぎのいとはるゝ身と知りぬれば

くるもくるしきこゝちこそすれ

伯

われをこそ忘れもはてめもろとも

うるし小萩のはなはさて見よ



六番

右のうたするの心ゆかす侍れば  
おしなへて宿のこはぎのするよはみ  
つゆもこゝろぞとまらざりける  
と見えはべれば左のまさるべきにや  
をみなへし 戀

大僧正

左

をみなへし咲く野へ毎に身にしみて  
はなこゝろなる戀もするかな

右

兵衛君

わがこひのなぐさむつまにあらねども  
折らですぎうきをみなへし哉  
女郎花くちなし色のはなれば  
いかにもえこそいはれざりけれ

七番

とてや  
薄 戀

顯輔朝臣

いとどなく忍ぶもくるしきのすゝき  
ほにいで、人に逢ふよしもがな

左

伯 卿

いかにせん真野の入江にしほみちて  
なみだにしづむしのゝをすゝき

右

左歌つねのさまならねどいさほに出なんなともいへれば  
とがなし  
右の歌涙に沈むといふこと心もわかねば  
おもふことおは野に立てるしの薄  
しのおこゝろのありがたきかな

八番

左 荻 戀  
と見たまふるもいか

そよくと萩吹くかせは音すれど

人はたのむることの葉もなし

右

よさのうらにひとむらたてる濱萩の

またたぐひなきこひもするかな

左歌ひとはたのむるなせいへるほどありつきてきこえ侍

れどももそこそ心よく見え侍らね

右歌はたはふれ歌にてや侍らんされいますこし目やつ

きはべらん

みぎはなるしほあしたまがふ萩は

仲 正

兼 昌 入 道

九番

左 蘭 戀

よしとを見ゆるよさのうらびと

基 俊

白つものひすびおけばやふちばかま

はなのしたひも解けがてにする

右

匂ふ香を君によそひてふちばかま

伯 卿 女

なづさふそでにつもぞこぼる

左歌よくはべれをすゑのことば歌姿に似ぬてちしてい

か侍らんされば

ふちばかま露のひすぶを見るよりも

たまちるそではなつかしきかな

十番

菊 寄 祝

左  
さみが經つらむ世をながつきに咲さぬれば

いくあさとしもしらぎくのはな

右

伯

見るひとよそながつきのはなれば

ひさしとさくぞうれしかりける

左歌ひたことばまことに心こころも及およばさればいかにも申まうがたくぞ

右とかく申まうすべきはとならねばたゞ

といはることはなれば眞清まきよ水みづに

ながれざりけりさくものしづくも

もしほぐさかきちらすよりちかの浦うらの

たまつしきもりみるめはづかし

住吉名勝記終

明治卅六年三月十日印刷  
明治卅六年三月五日發行

正價金貳拾錢

官幣 住吉神社神苑會藏版

住吉神社主典

校閱者 從八位 橋 本 光 全

大阪市東區備後町二百二十二番邸

著作兼 發行者 梅 原 忠 藏

大阪市南區邊町四百五十一番邸

印刷者 磯 波 伊 三 郎



發賣元

大阪市南區心齋橋通り邊町北入西側

矢 嶋 誠 進 堂 書 店

電話東二七六番

186  
134

### 官幣住吉神社清水講々則

- 第一條 本講ハ住吉清水講ト稱シ參拜者ノ崇敬心ヲ深カラシメシメテ爲ニ處々ノ手洗所ヲ清潔ニスルヲ以テ目的トス
- 第二條 本講ハ敬神篤志者ヲシテ結合シ講員組織ニシテ講員ニハ終身講員通常講員ノ二種トス
- 第三條 本講ニハ終身講員中ヨリ幹事若干名ヲ置キ事務ヲ整理ス
- 第四條 通常講員ハ一名一口ニ付年掛金貳拾四錢(則チ一ヶ月金貳錢宛)トシ六ヶ月分(金拾貳錢)ヲ一ヶ年二度ニ分テ掛込ムヘキ事
- 但シ講員一名一口ト定ムト雖モ一名ニテ二口或ハ數口加入アルモ隨意タルベシ
- 第五條 終身講員ハ年掛ケ金十ヶ年分(則チ金貳圓四拾錢)一時掛込ムヘキ事
- 但終身講員ハ入講ノ際神樂ヲ奉奏ス
- 第六條 本講ハ毎年春秋二回講員諸氏ノ家内安全之祈禱神樂ヲ奉奏ス
- 第七條 本講ニハ常雇掃除人ヲ置キ日々社内ノ處々ニ在ル手水鉢ヲ掃除セシム
- 第八條 本講掛金ハ毎年二月八月ノ兩度ニ小使ヲシテ一定ノ請取書ヲ持セ取集メシム

明治三十五年六月

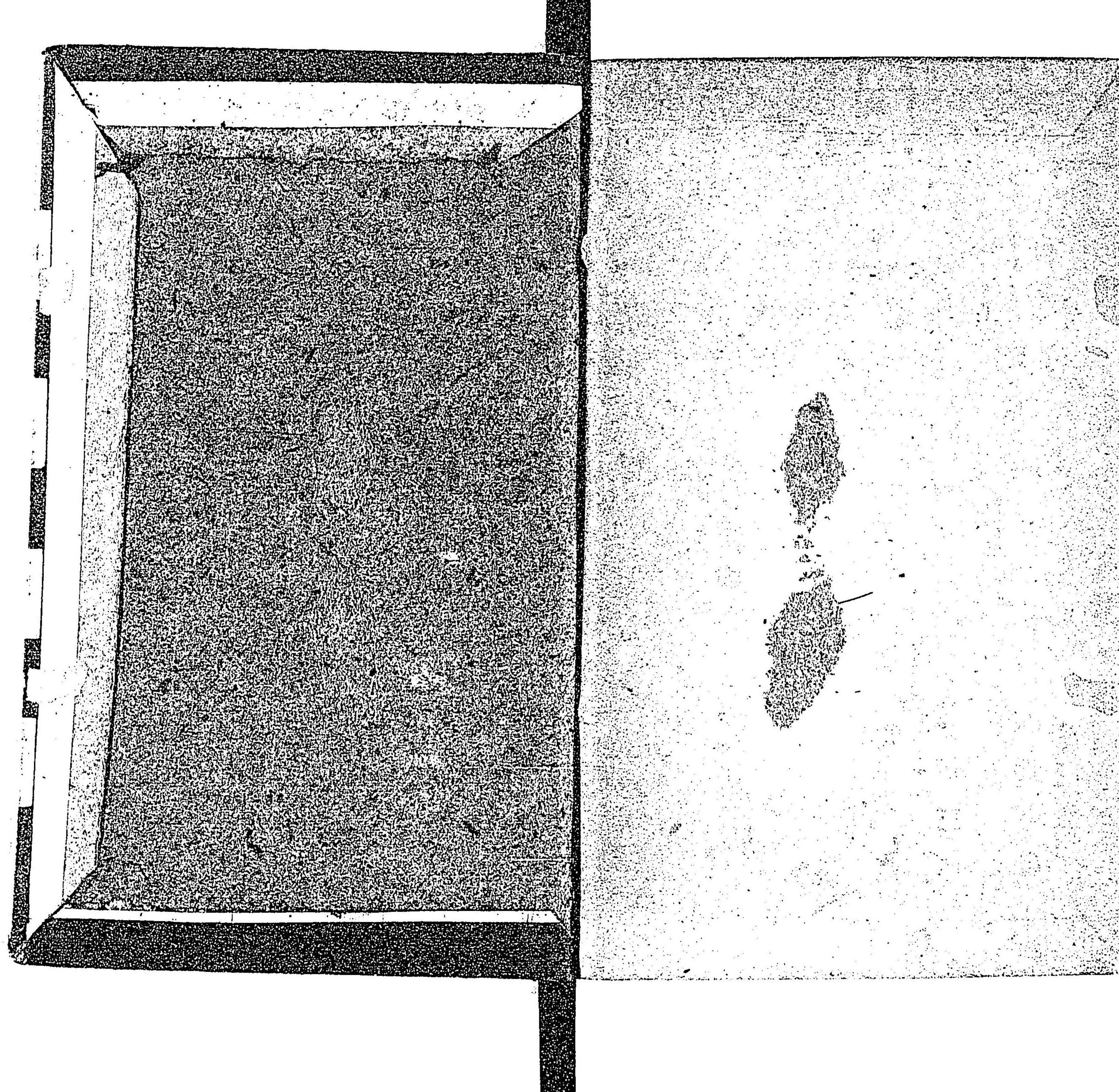
住吉文庫委員

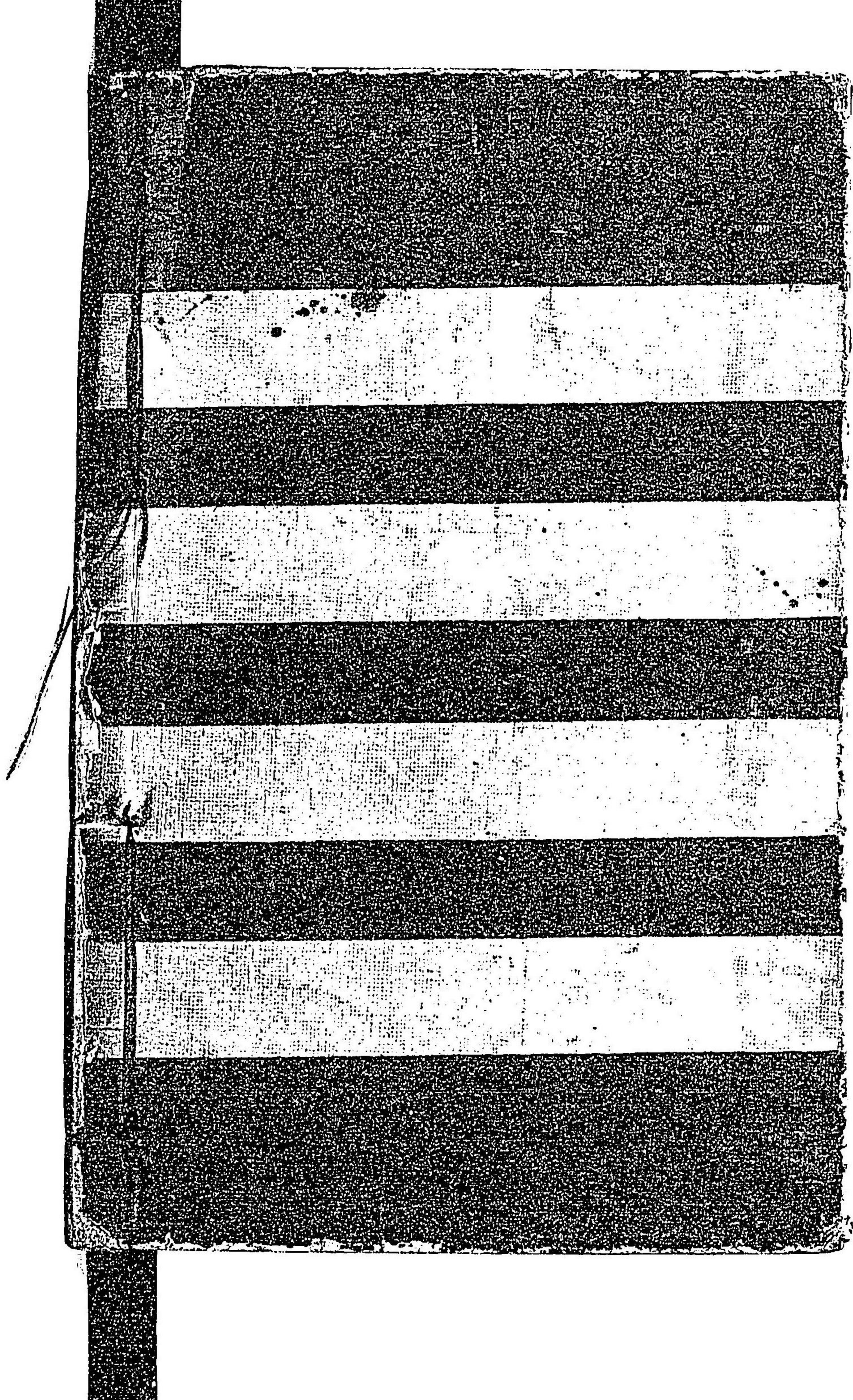
發起者

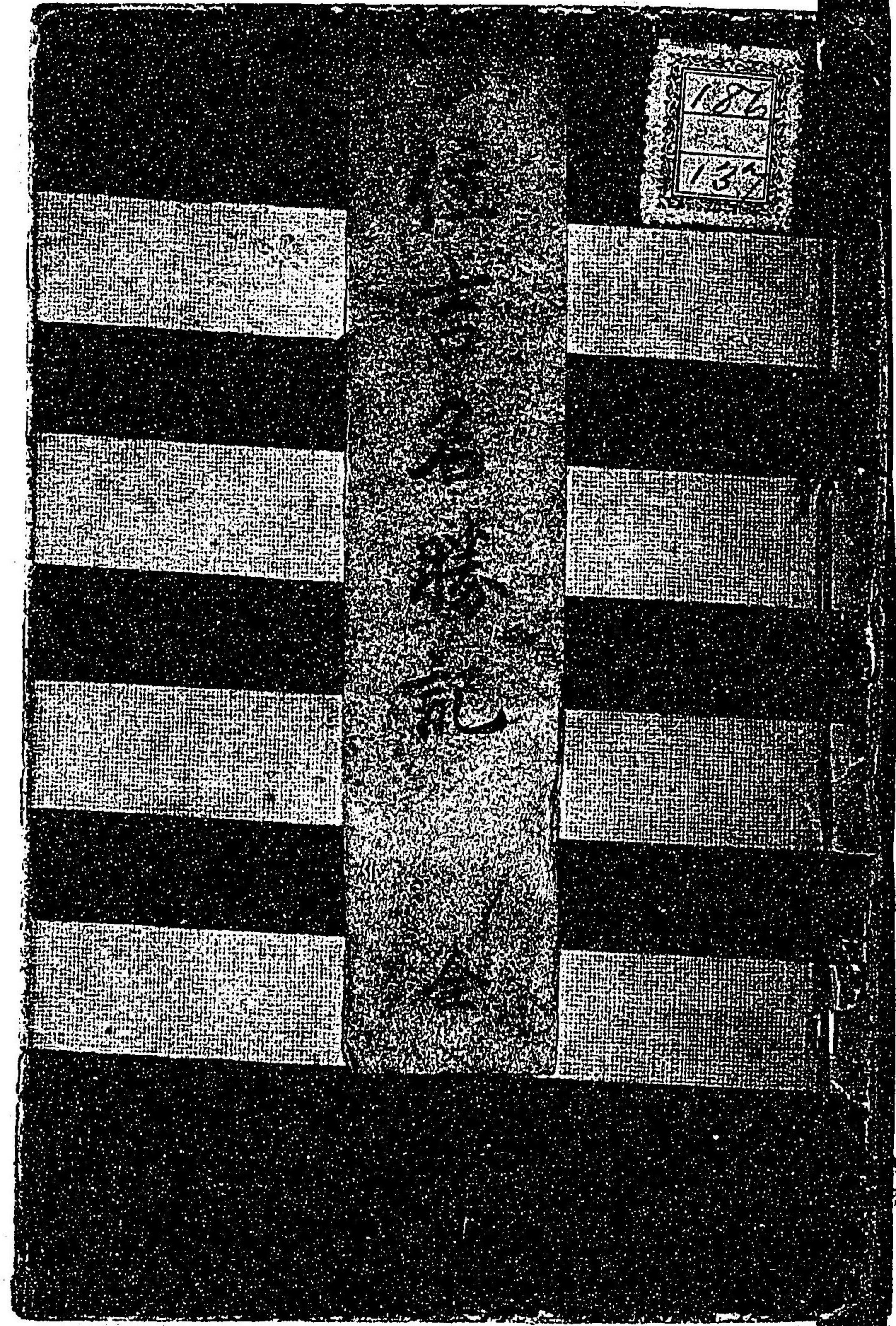
梅原忠藏

講員入會申込所

官幣住吉神社々務所内







025511-000-9

186-137

住吉名勝記

梅原 忠蔵 / 著

M36

ADC-2976

